

アフリカ隊報告(1991年7~8月)

菊池農業高校・生物 長野 清
元湧心館高校・地学 平 晋一郎
矢部中学・生物 藤吉 勇治

ブローグ

アフリカに行く5年前のこと、ニホンカモシカ生息分布調査のための予備調査で泊まった人吉市内の民宿で「アフリカに行こうか……」とある人が呟いた。

「あの広大なサバンナを見たい、本物をしかとこの目で確かめたい」そして授業で使う教材を作りたいというのである。本会の目的の一つに「生物教育に寄与する」という一文もあり、「いこう」となった。

1989年末までに次のように参加者が確定し、実施は1991年夏となった。

参加者(1991年当時)

中園敏之(蘇陽高校・生物)
平 晋一郎(荒尾高校・地学)
高野茂樹(八代高校・生物)
長野 清(第二高校・生物)
歌岡宏信(鹿本高校・生物)
松岡秀樹(工大高校・生物)
藤吉勇治(矢部中学・生物)
坂梨仁彦(玉名高校・生物)
坂本真理子(中央女子・生物)
長尾圭祐(市立高校・生物)
坂田拓司(球磨工業・生物)
北田 薫(多良木高校・生物)
平川朝子(信愛女学院・生物)
田畑清霧(南関高校・生物)
天野守哉(水俣高校・生物)
松浦 弘(江津高校・生物)

準備は、中園事務局長を中心に着々と進められ、事前学習会も一泊二日の日程で4回ほど行われた。

「アフリカ・ケニア」でのキャンプやロッジ(サファリで宿泊するための立派なホテル並の施設)での生活と、飛行機の都合でどうしても2日間ほど滞在しなければならないインドのボンベイでの日程をどうするか、言語の問題も含めて行われた。

それに、運のよいことに、女子栄養大学人間・動物学研究室の小原秀雄教授(当時、日本自然保護協会理事長、

WWF世界自然保護基金日本委員会理事)のご親切なアドバイスがいただけたこともあって、ケニアの国立公園、動物保護区をまわるおよそ3000キロにも及ぶ行程、スケジュールが完成した。

しかし、準備には相当の苦労があった。日本の旅行会社からはアフリカに行くまでの情報をもらっただけで、後はすべてを隊員が行うこととなった。

旅行幹旋業者

- 「道祖神」 航空便手配関係
〒141 東京都品川区上大崎3-1-5
目黒駅東口ビル1F
TEL.(81)3-446-0434 FAX.(81)3-446-1037
- 「WAKU WAKU SAFARIS L.T.D.」
ケニア滞在中の手配
Mr.Walter Dibogo, Mrs.Masako Takazaki
P. O. Box 58989, Nairobi, KENYA
TEL.506975

ナイロビのサファリサービス会社との国際電話での交渉、ファックスでのやりとり(隊長の中園氏が担当)、生息する動物(主に哺乳類と鳥類)、地質的なこと、蚊取り線香まで含めた生活に必要な品物、マラリアなど病気に対する医薬品類、ビデオやカメラそれに録音用の機材も含めた取材用品類、ケニアのスワヒリ(アラビア語で「東海岸の……」という意味がある)語学習など考えられることすべてにわたった。

各個人の事前準備などは次のようなものである。

- (1) パスポートの取得
1カ月前に旅行業者に提出して、ビザの申請手続きをしてもらわなければならない。
- (2) 予防接種証明書(イエローカード)の取得
コレラ 各地の大きな病院でできる。1週間間隔をおいて2回受けなければならない。
黄熱病 福岡か鹿児島島の検疫所まで受けに行かなければならない。渡航前1カ月以上経過していないと入国できない。

※両者の間隔は1週間以上空けなければならない。黄熱病の予防接種をすると、1カ月間はほかの予防接種ができないので、コレラと黄熱病の両方を接種する場合は、まずコレラの1回目、2回目を済ませ、その後1週間の間隔をおいて、黄熱病を接種する方法がよい。

(3) 旅行費用

航空運賃

熊本—大阪（回数券利用）	13,500
大阪—ナイロビー—東京	220,000
東京—熊本	23,300
ホテル代 ボンベイ（1泊）	10,000

サファリ・ツアー料金

ホテル・ロッジ・キャンプ・バス

入園料・食事代を含む	240,000
ドライバー チップ	4,000
旅行保険（A I U）	13,000
ビザ手数料（インド、ケニア）	15,520
予防接種料金（黄熱病、コレラ）	4,220
全体経費 （通信・送料、フィルム、電池など）	25,000

合計 568,540

★参考までに

お小遣い Travel Check Card: 1000 \$
 現金: 300 \$ + 50,000円
 （相場/RATE・1 \$ = 137円30銭）

添乗員なし。なにせ「熱帯アフリカ、マラリア蚊ブンブン、赤道直下、噂に聞く広大な大地溝帯の中のサバンナ地帯を攻めまくろう」というものである。おまけに、地球の歩き方「東アフリカ」という海外旅行の参考書によれば、「物凄い土埃、砂塵にみまわれる」と脅し文句がある。物好き、野次馬連にとって、涎タラタラ、まさに胸WAKUWAKU、血湧き肉踊る話がポロポロ出てくる。「さあ、それではどうする……」ビデオカメラに必要なバッテリー類の充電はどうするか……各ロッジの電圧はいくらか、これに必要な機器は何か、救急対策はどうするかなど……学習と準備はケンケンガクガクと続いた。

中でも、「ボンベイ国際空港でビデオカメラ、ライト、カメラ、録音機器などに必要なバッテリー類がハイジャック・テロ防止のために、荷物検査で没収される心配がある」との情報が一番困ったし、帰国日は8月14日という「盆」の帰省ラッシュの真っ最中である。羽田から熊本まで、一度に16名分の航空券が取れるかなど、善良な日

本国民である私たちの前に、「野生の王国」にたどり着くまでにクリアしなければならない難題がワンサと立ちあがった。それはまるでコレラ菌とマラリア病原虫が合体し、両手に壊れたビデオカメラをぶら下げ、引っ張り出された未現像フィルムを踏みつけ、大きな口に電池をいっぱいにくわえたバケモノに思えた。

悪戦苦闘と、2年間にも及ぶ周到な準備で難問を処理することとなった。

サバンナという大舞台に登場されると思われる動物の詳細なパンフ資料（坂田隊員を中心に）、スワヒリ語資料（平川隊員を中心に）、旅行ガイドなどが作成され、これらが随分役に立った。

大型の旅行用トランク三つに電池、蚊取り線香、カラーフィルム300本、ビデオテープ、カセットテープ、薬品類などの共同装備を詰め、個人用は寝袋も入れてリュックにした。ビデオカメラ4台、カメラ6台、照明装置1、録音機器3、三脚、など総重量500キロにもなる重装備となった。

5月、6月にコレラ（熊本市でも予防接種可能）、黄熱病（福岡まで行かねばならない）の予防接種を終え、抗マラリア剤も準備ができた。

全員自費の旅行だから、添乗員もいなければ通訳もない。海外旅行経験者もわずかな団体である。唯一の強みは、常日頃いろんな調査で活動を共にして培われた抜群のチームワークと「生徒のために授業で使う教材を作る」という立派な意識があるだけである。それを生かして隊の組織が涉外、庶務会計、装備、カメラ、ビデオ、記録、救急、録音、地質で構成された。費用は約1000万円。

出発は1991年7月24日、集合地熊本空港朝6時30分。目的地は「ジャンボ（スワヒリ語でこんにちわ、おはよう、こんばんわ、ようこそ、やあやあ、オッスなど挨拶にやたらと使える便利な単語）」の国、WAKUWAKUの国ケニアである。

ケニアの総面積は58万3千km²（日本の1.54倍）、人口は約2千万人である。ケニアが「野生の王国」と言われるのは、大地溝帯や、それに伴う火山や湖など、変化に富んだ地形、そして恵まれた気候など、豊かな自然があればこそなのであるが、何といっても、いち早く自然を自然のままに残す環境保護に努力したからにほかならない。

ケニア建国の父、ジョモ・ケニヤッタの政治力によって、独立（1963）以後、政治は内・外交的にも安定し、ケニヤッタの死後も、ダニエル・アラップ・モイ大統領によってその状態は保たれている。モイ大統領が密猟者たちから没収した約12トンの象牙の山に自ら火をつけ、

象牙の取引の全面禁止を世界にアピールしたのはまだ記憶に新しい。

しかし、最近まで野生の大陸であったアフリカも、現在は、開発と破壊によって、その主役であった動物達も、限られた地域に追いやられてしまっている。私たちのサファリができるのは、その領域内である。

野生の領域は次の3つに分けられる。

・国立公園 (National Park)

国が管理する特別指定区域で、公園の維持に必要な人の居住しか認められていない。

・動物保護区 (Game Reserve)

地方自治体が管理する野生動植物の保護区域で、昔からの居住や放牧などを認めている。

・国立保護区 (National Reserve)

国が直接管理する野生動植物の保護区域で、人間の居住を認めない。

それぞれの区域に入る場合には入場料を支払い、サファリには自動車を使う。自動車の代わりに飛行機やバルーンを使ったり、サバンナを歩いて回るウォーキング・サファリもある。ウォーキングサファリの場合はレンジャーを付けなければならない。自動車の場合は四輪駆動でなければ入れないところもある。

ケニアには国立公園 (N. P.) 7, 動物保護区 (G. R.) 3, 国立保護区 (N. R.) 1 の11カ所があるけれども、私たちが回ったのは次の7カ所である。

- (1) 東ツァボ国立公園 (Tsavo East N.P.)
- (2) 西ツァボ国立公園 (Tsavo West N.P.)
- (3) アンボセリ国立公園 (Amboseli N.P.)
- (4) マサイ・マラ動物保護区 (Masazi Mara G.R.)
- (5) ナクル湖国立公園 (Lake Nakuru N.P.)
- (6) サンプル国立保護区 (Samburu N.R.)
- (7) ケニア山国立公園 (Mt. Kenya N.P.)

アフリカ大地溝帯とケニアの地質

大地溝帯 (great rift valley) は、東部アフリカを幅40~60km, 延長6500kmにわたって南北に縦貫する大断層陥没帯である。東アフリカ台地の平均高度は約1000mで、その中央部には、ビクトリア湖の浅い水域で占められた大きな盆地がある。この盆地の東西両側には、台地からさらに1000~2000mも高い隆起帯がある。大地溝帯は、これら2つの隆起帯に沿って、東部地溝帯 (eastern rift) と西部地溝帯 (western rift) とよばれる2列の地溝帯に分かれる。

西部地溝帯はウガンダのアルバート湖の湖底に始まり、タンガニーカ湖とマラウイ湖を深く刻み、いくつかの細長くのびた湖の連なりからなって、モサンビークを経て

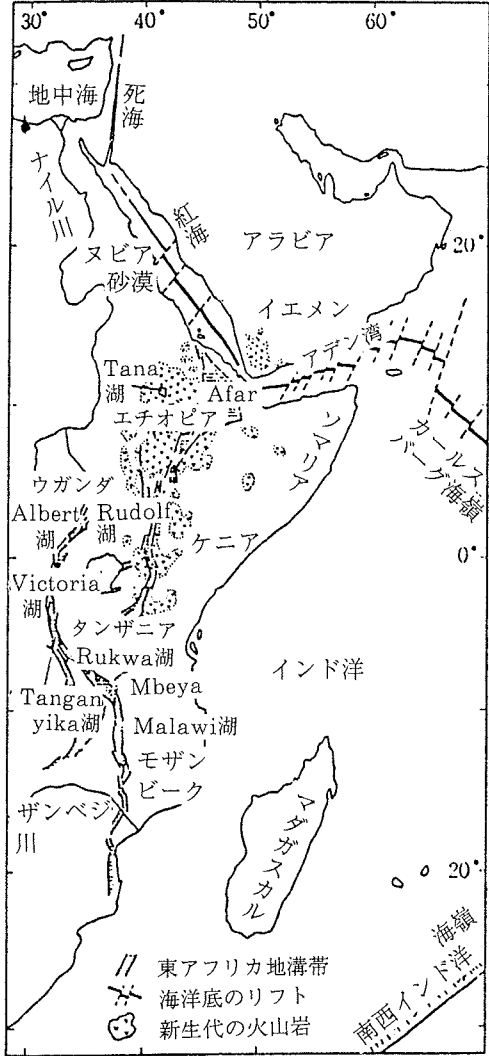


図1 アフリカ-アラビア・リフト系 (東アフリカ地溝帯, アデン湾-紅海-死海リフト). McConnell(1972*), Pilger&Rosler(1976*)による

インド洋に達する。湖で占められた地溝の各部分は、少しずつずれながら雁行状に配列している。アルバート湖とエドワード湖の地溝が食い違うところには、赤道近くでありながら氷河を抱いた高山、ルウェンゾリ山 (5109m) がそびえ立ち、先カンブリア界からなる大規模な地塁を形成している。タンガニーカ湖はシベリアのバイカル湖に次ぐ深い湖で、マラウイ湖とともにその湖底は海水面より低い。地溝の肩と湖底との高低差はタンガニーカ湖で3300m, マラウイ湖で2600mに達する。

東部地溝帯はヨルダンの死海の湖底から始まり、アカバ湾, 紅海, アデン湾の底をえぐり、エチオピアを北東

から南西に横切って、トゥルカナ湖を経て、ケニアを縦に貫き、タンザニアに達する。サッガーソンとペイカー(1965)は、浸食平坦面の高度変化を調べ、ケニア西部やタンザニア北部地域が第三紀以降1800m近く隆起したこと、及び隆起の形態が、南北に延びるドーム状を呈することをあきらかにした。この隆起帯をケニアドームとよび、またエチオピアの同様な隆起帯をエチオピアドームとよんでいる。東部地溝帯はこの2つのドームの中軸部を通して北ないし北東に延び、Afarにいたって北に開いた扇形の凹地となる。東部地溝帯のケニア及びタンザニアにはいる部分は、Gregory (1896) の名を取ってGregory riftと呼ばれている。Gregoryリフトはタンザニアでは不明瞭になり、いくつかの沈降帯に分かれて雁行状に配列しながら南西にのびる。

地溝内部は比較的平坦な地形で、これを横切る小隆起帯によっていくつかの盆地に分けられている。東部地溝帯に沿う湖の多くは、これら盆地の低部に水をたたえたもので、西部地溝帯のように深い湖はない。他に溶岩でせき止められた湖や火口湖もある。湖の多くは流出口のない孤立した水系の盆地をなし、非常に乾燥した気候のため、塩分濃度の高い湖となっている。ケニア南部のマガディ湖では、そこで形成された蒸発岩がソーダの原料として稼行されている。

地溝はいくつかの正断層を境にして落込み、Gregoryリフトでは高度差1500m程の急な断層崖で限られる。地溝の幅は平均約50kmで例外なく40~60kmの範囲内にある。断層の落差は3000~4000mと推定されている。

ビクトリア湖を中心に広がる盾状地は、その東と西を、Mozambique変成帯とUbendian変成帯と呼ばれる二つの先カンブリア時代の変成岩によって縁どられている。

Gregoryリフト地域の最初の地殻変動は、ケニア北西部のTurkana沈降帯の形成と、それに伴う中新生(1400~2300万年前)の玄武岩の流出に始まる。同じ頃、ケニア-ウガンダ国境地域に、中心噴火タイプのアルカリ火山活動があった。Gregoryリフト中央部から西方に分枝するKavirondoリフトに見られるカーボナタイトを伴うアルカリ複合岩帯の形成もこの時期のものである。中新生後期(1100~1400万年前)には、ケニア・ドームの上昇(約300m)に伴い、割れ目噴火タイプのフォノライトの流出があり、ケニア中南部地域を広くおおった。つづいて、ドーム中央部に西側だけが断層で切られた非対称な地溝が形成された。鮮新世に入ると、粗面岩質-玄武岩質の火山岩が地溝内部を埋め、溶結凝灰岩は地溝の肩を越えて外側へとあふれ出した。同じ頃、ケニア・ドーム東部にケニア山やキリマンジャロ山などの

孤立した中心噴火形式の火山の形成が始まり、その活動は更新世までつづいた。鮮新世末期までに、ケニア・ドームはさらに1500mも上昇し、その中軸部に現在見られるような地溝帯の構造がほぼ完成した。

更新世以後の火山活動と断層運動は、もっぱら地溝内部に限られるようになり、一連のカルデラ火山と、2~3km間隔で密に発達した断層破砕帯が形成された(Baker, 1972; Williams, 1970)。1965年10月、DawsonはGregoryリフト南部にあるOldoinyo Lengai火山からカーボナイト溶岩が噴出するのを目撃した(Dawson,

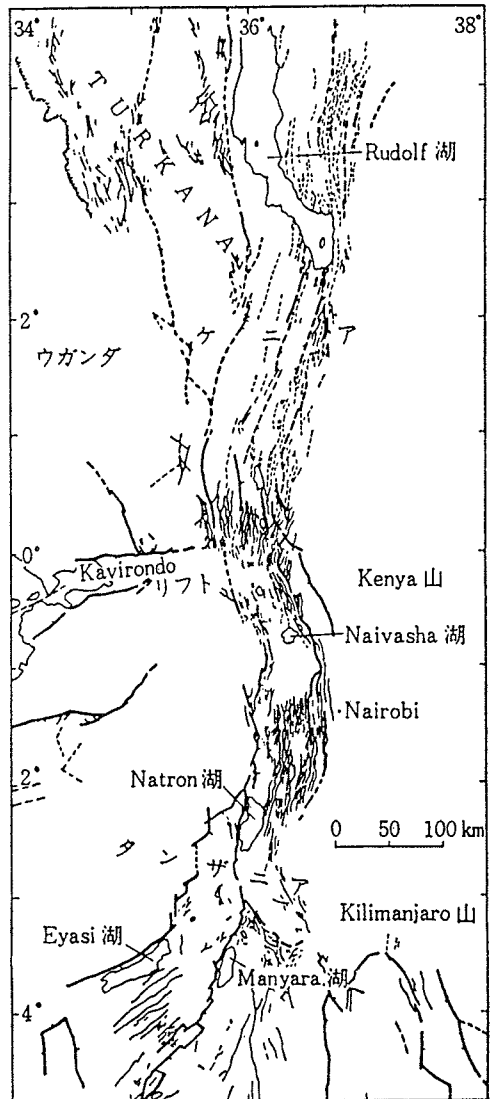


図2 Gregoryリフトの断層パターン。Baker et al. (1972*)による

1962)。この溶岩の噴出は、カーボナイトマグマが天然に実在したことを明らかにしたばかりでなく、その活動の場がリフト地域にあった点で注目されている。この地域は東部地溝帯の中でも比較的地震の多い所でもある。

ケニアの地質は、先カンブリア時代の基盤岩類で骨格をなし、その上に中生代末期ないしは中生代の体積岩が堆積している。ケニア東海岸のモンパサ周辺に分布するカルー層と呼ばれる地層も、この時代の堆積岩で形成されている。これらの堆積岩は大地溝帯の両側、すなわち東方や西方に広く分布しているのだが、大地溝帯の内側には分布していない。

大地溝帯の内部と周辺の景観を特徴づけているのは、新生代の火山岩類が広く分布していることである。例えば、エチオピア側では35万km²ケニア側では11万km²の火山岩類が噴出している。大地溝帯内部には、これらの火山岩類のほかにも新生代の堆積物も分布する。またこれらの堆積物の中でも、ケニア北部のトゥルカナ湖周辺やタンザニア北部のセレンゲティ平原南方のオルドバイ峡谷の新生代第四紀層からは、最古の人類とみられる化石人類が発見されている。

東部地溝帯と西部地溝帯の間の地形は低地であり、ここにはケニア西部、ウガンダ南部、タンザニア北部に広がる大湖ビクトリア湖がある。この湖はナイルの主要水源をなす世界第2の淡水湖で、面積は約7万km²（北海道の面積の約9割）に及ぶが、最大深度はわずか82mである。

引き裂かれつつあるアフリカ大陸

アフリカ大陸の骨格は盾状地で構成されているため、地震はほとんど起こらないが、大地溝帯内部やその周辺部は例外的にしばしば地震が起こるということは前にも述べた。震央の分布は大地溝帯に集中し、震源の深さは60kmよりも浅い浅発地震が多い。

このような浅発地震帯は、アフリカ大陸を離れると、アデン湾からソコトラ島の北を通り、カールスベルグ海嶺に至り、中央インド洋海嶺から南大西洋にのび、大西洋中央海嶺につながっている。アフリカ大地溝帯はこのように、大洋底を海嶺を伴ってのびている全地球的な地溝帯の一部であると考えられている。

紅海・アデン湾地溝の海洋底は、アラビア・プレートとアフリカ・プレートとの分離によって生じ、大陸内部の大地溝帯は今まさに裂けつつあるプレートの境界であると考えられている。大陸が裂けるスピードは1年におよそ5mm程度であるが、この分裂運動が1億年も続くと、アフリカ大地溝帯の断層崖の肩部は互いに500kmぐらい引き離されることになり、大地溝帯の低地は大洋となっ

てしまうだろう。

ナイロビの西方

ケニアの首都ナイロビは、標高約1700mの高原の町である。ここから西へ約50kmほど緩やかな坂道を登って行くと、突然断層崖が現れる。眼下には広大な断層陥没帯が広がり、サスワ火山などいくつかのきれいな火山が姿を見せる。

断層崖の頂部は標高2300m、数段の階段状になっている断層によって、標高1600mまで急激に落ち込んでいる。断層陥没帯の東西の幅は約60kmで、その西端には西側の断層崖が立ちはだかる。この東西2つの断層崖の間に広がるのがアフリカ大地溝帯なのである。1893年、イギリスのグレゴリーが初めてケニアの大地溝帯を踏査し、地質構造を明らかにしたので、ケニアの大地溝帯をグレゴリー地溝と呼んでいる。地溝帯の内部は乾燥気候のため、サバンナの草原がえんえんと広がる。8月は乾期のため草は半分枯れたような黄褐色をなし、それを食むヌー、シマウマ、ガセル、インパラなどが群れをなす。

グレゴリー地溝の内部を北進すると、ナクル湖が現れる。美しいピンクのフラミンゴの群棲で有名な湖で、塩湖である。

ケニアの気候については平隊員の次のような記録がある。

「ケニアでは、汗の出るようなことは殆どありませんよ。それよりも、寒くないようにセーターだけは必ず持って行ってください」前に一度ケニアへ行ったことのある方が何度もそう言われたが、特に汗かきの私には、なかなかそのまま信じていることが出来なかった。たしかに向こうの資料などを調べると、そんなに暑くもなさそうである。しかしなんとと言っても赤道直下で、日射は強いはずである。住んでいる人達の色は黒い。ともかく行ってみれば分かるということで、乾湿計を携えて行くことにした。

ナイロビで飛行機から降りたとき「これはセーターが要るな」ということが初めて実感として分かった。空港に着いたのが夜だったので気温は十数度であったろうか。それから機会ある毎に、毎日何回か温度と湿度を測定することにした。最高気温と最低気温は、晴れた日で、昼過ぎの31℃と早朝の13℃を記録した。確かに日較差は大きい。しかし赤道収束帯のせいから、8月は乾期と言えども、からりと晴れた日は減多にない。たいていはうすすらと曇っている。温・湿度の測定は、次から次へと場所を移動するし、車の中だったり、木陰だったり、ロッジやテントの入口だったり、

日	日 程 (現地時)	交通機関	宿泊施設	主な研修内容
8/1 (木)	ロッジ発 (08:00) ナイロビ着 (12:00) ナイロビ国立博物館見学 ホテル着 (17:00)	サファリ カー	アンバサ ダホテル	生物の進化, 特に人類の進化を中心に見学, 岩石・鉱物標本観察
8/2 (金)	ナイロビ発 (08:00) マサイマラ保護区着 (12:00) 予備調査 キャンプ地着 (17:00)	サファリ カー	キャンプ サイト	移動, 保護区内自然環境の概観観察撮影 地形地層の観察撮影
8/3 (土)	キャンプ地発 (08:00) 〈終日観察撮影記録〉 キャンプ地着 (17:00)	サファリ カー	キャンプ サイト	ヌーの大群とライオンの狩りの観察撮影
8/4 (日)	キャンプ地発 (08:00) 〈終日観察撮影記録〉 キャンプ地着 (17:00)	サファリ カー	キャンプ サイト	生態系, 食物連鎖, 生息域などの観察撮影 キャンプ地周辺の地質調査
8/5 (月)	キャンプ地発 (08:00) 日中生物観察, 夕食後に夜間観察 (夜行性肉食獣の行動)	サファリ カー	キャンプ サイト	ライオンの社会行動の観察撮影を中心に
8/6 (火)	マサイマラ保護区発 (08:00) ナクル湖国立公園 キャンプ地着 (17:00)	サファリ カー	キャンプ サイト	フラミンゴなど水辺鳥類の観察撮影記録 地形観察撮影
8/7 (水)	ナクル湖発 (08:00) サンブール保護区 予備調査 ロッジ着 (17:00)	サファリ カー	サンブール ロッジ	移動, 保護区内自然環境の概観観察撮影 地形観察撮影
8/8 (木)	ロッジ発 (08:00) 〈終日観察撮影記録〉 ロッジ着 (17:00)	サファリ カー	サンブール ロッジ	生態系, 食物連鎖, 生息域などの観察撮影
8/9 (金)	ロッジ発 (08:00) Mt. ケニア国立公園 予備調査 ロッジ着 (17:00)	サファリ カー	マウンティ ンロッジ	夜行性動物の行動を観察撮影記録 地形観察撮影
8/10 (土)	ロッジ発 (08:00) 〈終日観察撮影記録〉 ロッジ着 (17:00)	サファリ カー	マウンティ ンロッジ	生態系, 食物連鎖, 生息域などの観察撮影, 地形観察撮影
8/11 (日)	ロッジ発 (10:00) ナイロビ市着 (12:00) 午後休養	サファリ カー	アンバサ ダホテル	移動
8/12 (月)	ホテル発 (10:00) 植物園・蛇園見学 市内見学 ナイロビ発 (23:40)	バス・エ アインディア	機内泊	熱帯植物, は虫類の見学, 民族舞踊見学
8/13 (火)	ボンベイ空港着 待機 (08:00) ボンベイ空港発 (16:00)	エアイン ディア	機内泊	移動
8/14 (水)	成田空港着 (08:30) 羽田空港発 (11:20) 熊本空港着 (13:05)			

ないし, そのときの鳥の温もりを覚えている。

探険や冒険が好きな私にとって, 本や写真などで見る野生の王国「アフリカ」はとても魅力的なところとして頭から離れない。そして, いつか必ず行ってみたいと思っていた。

なんとその夢が夢でなくなる出来事が起きた, 熊本野生動物研究会のメンバー数人で調査した動物の話をしているとき, 「どうだい, アフリカに行ってみたいと思わないか」という話が飛び出したのだ。カモシカ, キツネ, タヌキ, 野鳥など野生動物の調査研究をしている会のメンバーにとって, アフリカはやっぱりあこがれの地なのだ。

しかも発起人の一人, 中園氏は10年程前に一度アフリカに行かれた経験がある。最初6名だったアフリカ行きのメンバーも次第に増えていった。期日も1991年7, 8月と決まり, その1年前にメンバー全員が集まり, アフリカ行きの準備が具体的に始まった。

旅のスケジュールは中園氏が現地と交渉を重ね, 手作りのプランを作られていった。半年前になると中園氏は連日のようにアフリカの現地のスタッフと電話やFAXで連絡を取り合っていた。

メンバーは最終的に16名。さらに共同通信社の女性記者三好典子さんも取材のために同行することになった。↓

7月24日

大阪空港, 14時45分, エアーインディア305便に搭乗, いよいよ出発, 機内に入るとサリーを身にまとったインド人のスチュワーデスが笑顔で迎えてくれた。

機内は独特のかおりに満ちている。「香」のかおりなのか, それともスパイスのかおりなのだろうか。エキゾチックな気分させてくれる。14時55分, 離陸。日本としばらくさよならだ。窓の下には, 大阪の市街地が広がる。ぎっしりと詰まったビルや家。騒音と排気ガスの中に人々がひしめいて生活している。象徴的な今の日本の姿を見ながら日本を離れた。

目的地はインドのボンベイを経て広大なアフリカのサバンナ, 野生の王国ケニアである。

※先ずボンベイへ

ケニアの首都ナイロビは, 東アフリカ最大の都市であるが, 日本からの直行便はない。しかし, なんと言っても東アフリカの表玄関であり, いくつかの航空会社の便がある。最も便利なのが次の便のようである。

◎パキスタン航空: ペキン, カラチ経由及びマニラ, バンコク経由

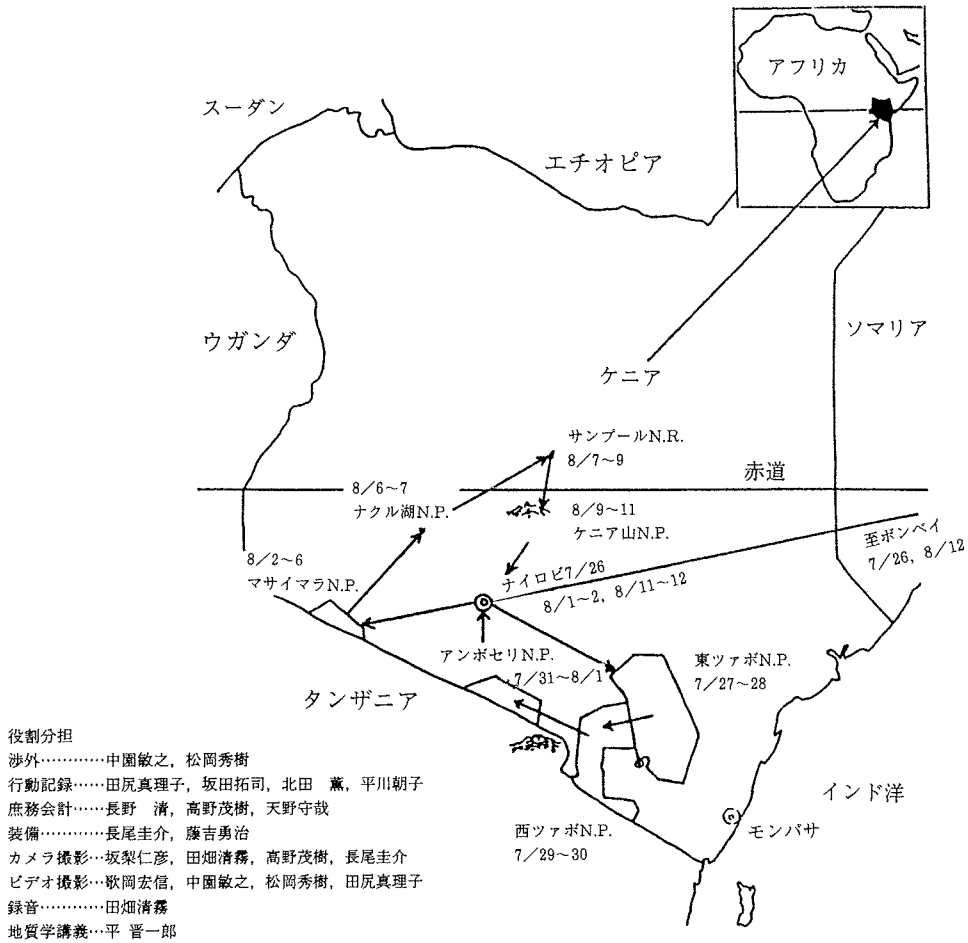


図3 行程と役割分担

◎インド航空：バンコク，ボンベイ経由（ボンベイで1泊）
インド航空を利用し，ボンベイで1泊することになった（正確には1泊半）

15時5分，大阪空港離陸。夕食を食べたり，ワインを飲んだり，葉書を書いたりしているうちに，眼下に大きな川が見え始めた。

メコン川の上流である。森林地帯を過ぎ広大な畑地帯を通り養殖池のようなものが見える。やがて凸凹の激しいリアス式海岸に出る。日本を発って5時間10分，18時15分（現地時は2時間遅れ）バンコック空港着陸。洋式の家が立ち並ぶ。ずっと雨の中を飛んで来たが，空港は

大雨。夕暮れの空にどんよりと厚い雲が立ちこめている。ここできらりと席が空く。乗員が人員チェックを何回も繰り返している。

給油のため1時間停泊の予定だが，時間がきてもなかなか出航の気配がない。タバコも喫えないので少々退屈である。機内で北九州少年使節団と会う。デリーに2泊して，ケニアへ19日間の予定で旅行。目的はアフリカで木を植えることだった。日本人が破壊した熱帯林を，その後子供達が行って修復するということであろうか。それとも気休めの罪滅ぼしか。何とも皮肉な感じがした。

19時55分，やっとバンコックを離陸。40分も遅れた。Disembarkation Card（入国審査用紙）を記入する。不慣れのためか少々面倒である。皆，何回も書き間違い

(このへんが添乗員のいない弱みである) 結局、スチュワーデスから用紙の綴りをいただくはめになった。

21時(日本時23時)また夕食が出る。前のと同じようなもので、カレーライス、パン、海老などの煮染、ヨーグルト、ゼリー、紅茶など品が多くて食べきれない。

22時(日本時7月25日1時30分、日本より3時間30分遅れ)デリー到着。少年使節団の一行が降りる。前のシートのインド人は、横になって何か吐いて眠っている。酔っぱらってバンコックから乗り込み、調子よく一人で歌をうたったり、何かつぶやいたりしていたが、ついにダウン。乗客男女が5~6人で嘔吐物を始末し始めた。乗員の皆さんも大変である。

デリー空港にたちよりここでまた1時間ほど停泊。23時デリー空港離陸。

7月25日(木)

0時30分(日本時4時)真夜中、やっとボンベイ空港に着く。闇の中に街の灯りが広々と点在している。

空港では、銃を持った兵隊の厳重な警戒が緊張感を高める。あれほど出発前に心配していた入国審査も「教員団体」というアピールで殆ど荷物チェック無しで通過したがビデオやカメラを担当する装備班が何時たっても出でこない。ここではあまりに高価な品物なので調べられているとのことである。英語を駆使して1時間語、パスポートに機会番号をひかえられてようやく出てこられたのは午前2時近くになっていた。

ボンベイにて

薄暗い空港ビルの路傍で、ホテルからの迎えのバスを待つ。何かを物色するような男達が数人、我々の周囲をうろろろしている。ひったくられはしないかと気が気でならない。7~8歳くらいの子供も何人か手を差し出しってくる。

午前3時ホテルからの迎えのバスがくる。段ボール箱をバスに乗せようとしていると、その辺にいた男が、箱の紐を握ってちょっかいを出し、乗せ終わると“One Dollar”と言って手を差し出す。頼みもしないのに、いらぬお世話と思って、お金をやらずにバスに乗ると、しっこく追ってきて外からバスの窓を叩いた。

バスは日本製のマイクロバス。室内は真っ暗で、行き交う車もスモールランプを付けていれば良い方で、ヘッドライト無しの車が多い。おまけにバックミラーも殆どの車からはずされている。「前方だけをみんなが注意をすれば安全だ」ということなんだろうと妙な気持ちで納得する。

15分ほどでSentauro Hotelに着く。なかなか豪華なホ

テルでほっとしていると、今からroomを作るから1時間ほど待ってくれとの事。その間レストランでビールを飲みながら待っていたが、なかなか部屋が決まらない。

中園隊長が「ここまで来るのに3年かかったなあ」と言う。隊員全員、道のりの長さにうなずいた。午前4時20分。1時間半も待ったろうか、ボンベイから乗り合わせた東京理科大学の学生3人が先に部屋へ行く。我々の部屋が決まったのは既に朝の5時を回っていた。やっと部屋に行ってみると、3人の部屋にベッドが2つしかなくて、慌ててもう一つ簡易ベッドを作ってもらったり、すったもんだである。シャワーを浴びて眠りについたのは朝の6時であった。

4時間ほどぐっすり寝て10時頃起床。朝食はトーストとパインジュース、それだけ。午後1時頃、今度は昼食、チャイニーズレストランでカレーライス。食後少々疲れたので、横になってうつらうつらしていたが、せっかくボンベイに寄ったのだから午後はみんなで市内見学に行こうということになった。

タクシーは料金が高いので(1人10ドル)ホテルのバス(タクシーの10分の1位の値段)で出かける。物凄い湿気と人間の数であった。車も物凄い音を立てて突っ走る。他の車とはすれすれ、サイドミラーなどない。他の車を見てもやはりサイドミラーなどまともに付いているのはほとんど見かけない。人が居ようが居まいがなんのそので、轢かれるように「ボサツとするな」といった感じで突っ走る。よくしたもので、こちらがヒヤヒヤしているほど事故もないように、歩いている人も、要領よく、慌てもせず、事も無げに、スッとよけてしまう。

カムラ・ネルー公園の植物、鳥を見学し、Indian Gate(インド門)インド門の広場に降り立つ。

この門はイギリスの植民地時代に建てられ、海に面して立っている。松浦隊員がプランクトンネットを持ち出して、見物人の注目を浴びながらネットを海に投げ込み引き始めた。海は黒く淀んでいる。バスへ戻る時、コブラ使いの老人が籠を開けて、中のコブラを見せてくれたがゆっくりしている暇がない。若者、女、子供など、物売りの攻勢が激しい。ちょっと興味を示したらしっこくつきまとわれる。おもに絵葉書のようなものだが、値段でも聞こうものなら何処まででも着いてくる。プリンスオブウエールズ博物館にも行きたかったのだが、時間がなく諦めることになった。道を走りながら、門の外から建物を見ただけで、博物館を見たことになった。

午後8時より夕食。ワイン1杯48ルピー(1ルピーが8円)。トマト、キュウリ、焼き飯、ケーキ、カレー(カレーの種類は多く、激辛は強烈だった)、肉などバイキングスタイル。

7月26日(金)

朝5時に突然部屋の電話が鳴った。モーニングコールだったのだろうか。坂田隊員はすでに朝の散歩に出かけていた。

窓の外のホオノキの枝にはまたカラスが来ていた。ハウスクロウという鳥だ。朝のミーティングでこの日のスケジュールを確認した後、多くの隊員は荷物の整理や荷作りなど出発の準備で午前中費やした。税関でトラブルがあればみんなに迷惑がかかるので、持ち物には非常に神経を使う。ストロボ、カメラ、ウォークマン、電気剃刀、懐中電灯など全て電池類は抜いてしまっ、誤解されないよう、予定通り一緒にまとめてしまった隊員が多かった。電池や計器類が一番警戒されるということだが、時限爆弾などによるテロの多い当地としては、テロ予防策としてやむを得ないことだった。

午後1時にホテルをチェックアウト、バスで空港に向かう。20分後、空港に着く。これからの出国までの手続きが大変だ。荷物のチェックを受ける。検査はやはり厳しく、お金を要求される。つまり、ワイロだ。松岡隊員は、10ドルの要求に12ルピー(約60円)を細かくおろまげ係員の手に突っ込んでさっと通過してきた。(でかした、アンタハエライの声援に松岡隊員の胸ドキドキはおさまった。)

13時、Centaul Hotelを後にする。15分程でボンベイ国際空港に着く。ホテル～空港間は、おんぼろバス(マイクロ)がピストン輸送で客を送り迎えしている。カメラの電池を抜いているので写真も撮れない。

14時30分、Check Baggage, Hand BaggageのCheckが無事終了。18時20分いよいよ搭乗。19時5分やっと離陸。空港へ着いて飛び立つまで6時間近くかかった。

ある隊員はボンベイでの印象を次のように呟いた。

「インド門では心が重くなった。かつて、このインドを支配したイギリスとマハトマ・ガンジーの姿が目には浮かぶ。ガンジーは偉大なアジアの指導者だった。インドの平和と国民を公平に見たその姿勢は、私たちのアフリカへの門をどうくぐるのかを問うものにも思える。どんな姿勢で野生動物たちへの門をくぐろうとするのか。共に生きるという視点を忘れてはならないように思う」と。

平隊員の感想の中にこんなものもあった。

「一口で言えば余り楽しい2日間ではなかった。飛行機には酔っぱらいが乗ってきて反吐を吐く。空港では頼みもしないのに手を出してきてチップを要求する。観光地では物売りや物乞いに取り巻かれてゆっくり見物できない。街中は汚くて不潔な感じ。タクシーの料

金はふっかけられる。バスに乗ればおんぼろで生きた心地はしないほど運転は荒い。1時間待ってくれと言われたら3時間くらい待つ積もりでいなければならない。空港での税関のチェックは厳しい。

以上のようなことを言ってしまうと、全くいいところなし。そんな所にはわざわざ行かなくてもよろしい。と言うようなことになってしまうが、考えてみれば、これは我々日本と生活習慣や環境の違いによって、モラルや価値観が少しばかりずれているということ、特に驚くことはない。1週間も居れば慣れてしまうことではなからうか。

実はそれ以外に何か物凄く強烈な印象をうけたものがある。それが何であるかよく分からないが、遅いというか、罔々しいというか、感無しというか、ともかくみんな生きるためにそれぞれ必死で頑張っていると言う意気込みに威圧される。うようよしている人達が、大人も子供もみんな目が光っている。何か底知れないエネルギーを秘めているようである。もっとインドの広い範囲をゆっくり時間をかけて歩いてみたいという気持ちにかられて、ボンベイを後にした」

藤吉隊員のメモ

空港の外でホテルへ行くバスを待っていると、5、6歳位の男の子が走り寄ってきて「1ペニー(お金)……チョコレート……」と、物乞いをする。

そして次々と子どもたちがやってきて私たちから離れない。ちょうど私の息子や娘と同じ年頃だ。思わずもっている物を与えそうになってハツとした。「これはやさしさだろうか」結局何も与えなかった。その子どもたちを見ているのはとても辛かった。差しだした小さな手の平と、大きな目がいつまでも頭から離れなかった。

バスの窓からボンベイの町を見れば、走っている車はどれもかなりボンコツ。道路は車であふれている。それにクラクションの音がずさまじい。驚いたことに、ほとんどの車にバックミラーがない。前の車との間が少しでも空けば横からすぐに割り込んでくる。ひとつまちがえば、交通事故だ。

とても気になったことがあった。信号で車が止まると、道路脇から子どもたちが車の間をぬう様にして私たちのバスに走り寄ってくる。手をのばし物乞いをするのだった。この子どもたちをはじめ人々の生活はかなりきびしい。バスが動き出し「あぶないよ」と子どもたちの手をふりほどく。たまらなく胸が痛んだ。

ケニア到着

しばらくぐっすり寝て目が覚めたら、ケニア時で22時30分（日本時27日4時30分・日本より6時間遅れ）、眼下に夢にまで見たケニアの灯りが見え始めた。ボンベイから約6時間、大阪から約19時間かかったことになる。

22時35分、ケニアアツク空港へ着地。アフリカ大陸だあ万歳！ 窓から外を見ると夜なのに薄明るい星空である。何処までも広い。何処から何処まで空港なのか境が分からない。町の灯りもばらばらである。機内のアフリカ人達は長袖やセーターを着始めた。「外は寒いのであろうか……」

機内から出たらまずアフリカの空気を深呼吸しようとタラップに足を踏み出した。「ううっ…寒い」これがアフリカでの第一声だった。みんなも「寒い、寒い」と言いながら、ゲートへ急ぐ。入国審査のあと税関のチェックがある。

税関の所で背の高いアフリカの紳士が私たちを待っていた。現地では私たちの世話をさせていただく旅行社のデイボゴさんだ。デイボゴさんが観光大臣の招待状を係官に見せて、私たちはほとんどチェックなしで税関を通った。ロビーではデイボゴさんの奥さんや他のスタッフも出迎えに来ていた。奥さんは日本人だ。「ようこそいらっしゃいました」とデイボゴさんが流調な日本語で挨拶されると、奥さんが「ケニアは寒いから、びっくりされたでしょう」と言われた。さっそく3台のワゴン車に乗り込み、ナイロビ市内のホテルに急ぐ。車の中で奥さんがナイロビは標高が1800mあり、夜は気温が10度近くまで下がるので暖房やセーターなどが必要なことを話された。これが赤道直下の国の気候とはとても信じられない。

空港から市内へ続く道路の両側には電柵が張られている。空港が出来た当時ロビーにライオンが侵入してきた大騒動になったからだと言った。しばらく行くと見慣れた看板が目につきました。日本の自動車メーカーのものだ。ショールームもある。私たちの乗っている車も日本製だ。けっこう乗り心地はいい。奥さんが「この車でサファリをするんですよ」と言われ、驚いた。サファリに出るのはもっとがんじょうで、しかも四輪駆動車だと思っていたからだ。

7月27日(土)

午前0時（日本時6時）ケニアアツク空港での入国手続きは割合簡単に済んだ。気温は22℃で肌寒く、ここが赤道直下とは思われぬくらい。Mr. Dibogo（現地旅行斡旋業社WAKUWAKU SAFARIS L.T.D.社長）が迎えに来てくれたマイクロバスでHotel Ambassadeurへ向かう。真夜中の薄明りで見える草原は何処までも広

く美しい。車窓から吹き込む風は爽やかである。18km、20分程で着く。

Hotelで迎えてくれる人達は、みんな大変愛そうがいい。午前1時、部屋に入り荷物などを整理してやっと落ち着く。ところで、バックパック（リュック）の上部の所にいれて置いた懐中電灯がない。上部の袋の中のもの全部抜き取られている人もいた。ボンベイの空港でやられたらしい。ボタンやファスナーで開かる所には人の欲しがするような物は入れない方がよいということが分かった。

風呂には入って床に就いたのが2時。5時間ほどぐっすり寝て7時頃、朝の騒音で目が覚めた。5階というのに車の音がひどい。気温17℃、湿度85%、空はどんよりと曇っている。朝食は、パパイア、パイナップル、バナナ、トマト、パン、ソーセージ、ベーコン、フライドエッグ、スクランブルエッグ、ジュース、コーヒーなど大変なご馳走である。飲み水は沸騰湯を水筒に入れて貰わなければならない。共同装備の買い出し部隊が帰って来るまでしばらく待った。

「ジャンボウ！」2号車の運転手がにこやかに挨拶して来る。「ジャンボウ！ Mr. ムワレ（MWALE）」と我々も“ジャンボウ”で答える。大変気分がいい。車は日産特注の“URBAN”，天井を押し上げると屋根のようになり、立ち上がって外を見ることが出来るようになっていて。町でみる車は、日産、三菱、トヨタ、ベンツなどが目立つ。9時30分 Hotelを出発。これから本物のわくわく、ワクワク、WAKUWAKU……胸ドキドキ……いよいよアフリカンサファリ第1日が始まる。

第1日目・ツァボ国立公園（7/27～29）

朝5時30分、車の騒音で目が覚める。アフリカでの最初の朝は人間の生活の音で始まった。それにしてもすごい音だ。外はまだ薄暗い。うるさいけれどアフリカの人々のエネルギーを感じる。その音を聞きながらまたウトウトする。

7時30分、再び目が覚める。今度はすばらしい野鳥の声で起こされた。3種類以上は鳴いているだろう。外は曇り空。窓を開けると、外の冷たい空気が入ってきた。なんで冷たい空気だろう。これがアフリカ？

窓の外にはナイロビの街が広がる。まわりのビルのあちらこちらに青色に輝く野鳥（ニシブツポウソウ）が見える。

8時に中園、長野、藤吉隊員らはバッテリー（電池）を買うためにホテルを出た。バッテリー類は空港の税関でのチェックが厳しいために持ってこれなかったのだ。必要な数を買ってそろえるために数軒の店を回り、急いで

ホテルに引き返した。

9時20分、ホテルの前に3台のサファリカーが迎えにきた。空は晴れ、日が射してきた。気温は15度くらいだろうか。とてもさわやかだ。3つのグループに別れて車に乗り込んだ。私たちのグループのドライバー（兼ガイド）は背の高い、笑顔のすてきな若者だ。名前はジェームスと言う。彼らは大学で動物学を学んだサファリの案内人なのだ。

朝9時30分、ホテル・アンバサダを出発し、3台のサファリカーに分乗し南東の方向へ走る。目的地は東ツァボ国立公園（Tsavo East N.P.）、ナイロビから東海岸のモンバサまで約500キロ伸びているほぼ直線の高速道路（モンバサハイウェイ）を走る途中にある。真っ青な空の下をナイロビから約4時間30分、360キロ先の東ツァボ目指して爽快？に典型的なサバンナ地帯を走った。



ナイロビから東海岸のモンバサまでまっすぐ伸びる500kmの高速道路はサバンナ地帯をゆく

土の色がだんだん赤っぽくなり、やがてその色は鮮やかな赤茶色になった。ラテライトと呼ばれる酸化された土なのだそうだ。アフリカの色だ。

途中ガソリンスタンドで小休止。売店でジュースを買ってみんなで回し飲みをする（ウマイ!!）。

近くにアフリカハゲコウが飛んで来た。でかい！そして他にも周りにたくさんの鳥がいる。「なぜこんなに色が鮮やかなのだろうか」はでなくらいだ。これもアフリカの色だ。ガソリンスタンドの脇に名前がわからない1.5mくらいの緑色の木があり、それを見ていたとき歌岡隊員が突然「おおっ」と声をあげた。なんと良く見るとカメレオンがいるのだ。「自分は木だぞ」と私たちにアピールするかのようにつくくりちした動きをし、時々動きを止める歩き方をしながらだんだんと木の上の方へ登っていく。色は緑色だ。ところが、木の一番上に登った時、体の色が少し黒っぽくなった。みんながカメラを持って集まりカメレオンはカメラの放列を浴びる。誰かがカメレオンに触ろうとした瞬間、地面にポトリと落ちてさっさと逃げだした。すると体の色がみるみるまだら模様が変わり、姿をくらました。「トウエンデイ（スワ

ヒリ語。さあ、出発だ）」ジェームスの声がする。

サファリ・カーは日産車。途中オーバーヒートしたり、運転台の外側に付けた特製のエア・クリーナーがはずれて落ちたりする。時速80km、4車線、舗装はしてあるが所々に凸凹、中央分離帯はない。飛び上がり車がバウンドして、天井に頭を打たないように注意する。

道の切り通しには火山灰の層（tuff）がきれいに露出し、西側には溶岩台地・火山の山波が、東側には変成岩の階段状の崖が連なっている。ここはケニア・ドームの東翼の部分に当たる。

東ツァボN.P.と西ツァボN.P.に分けられるツァボN.P.は、ナイロビの南東にあり、モンバサ・ハイウェイと鉄道によって、面積は東が11000km²、西が8500km²、両方合わせると日本の四国がすっぽりは入ってしまうほど大きい。

乾期のため、草（イネ科の植物）は枯れたようになり、黄褐色の草原が続く。乾燥に強いアカシヤがまばらに生え、まさに典型的なサバンナの風景を目の前にした。

面積が広いので、草原やブッシュはもちろん、変成岩の丘・山、火山、川、湧水など変化に富んだ景観を充分楽しむことが出来る。（あるガイドブックには、ツァボN.P.をすみからすみまで見るには7カ月はかかるというらしい）。

2時間ほど走ると少しは道が良くなった。とたんにスピードが時速100kmになった。バナナ園、オレンジ園、ジャガイモ畑が見える。焼き畑にはトウキビが植えられ、人（ガンバ族）が点々と働いている。

途中、車が給油している間、その辺の木の枝を見ると、カメレオンがきょろきょろしている。高い木の上を見ると、ムナジロオナガモズ、アマサギ、ハゲコウなどなど確かに動物が多い。トムソングゼルが驚いて逃げて行った。植物はブーゲンビリア、ユーホルビア、バオバブ、アカシヤ、サボテン、アロエなどが目についた。

鉄道の踏切を通り抜け（一旦停止などない）、しばらく行くと東ツァボN.P.のGateに着いた（ナイロビ〜ヴォイまでは約360km）。

公園内に入ったらすぐグラントガゼルが姿を現した。ここから先は舗装道路はない。砂塵に中を走る。熱帯特有の赤い土・ラテライトのほこりはすさまじい。

Gateでの入園の手続きに20分ほどかかる。

ゲートの横でさっそくシマウマが私たちを迎えてくれた。しかし、つくり物のようにじっとこちらの方を向いている。「さっそくシマウマの歓迎とはあまりにもタイミングがいいな」と長野隊員が言う。そして「もしかしたらデイズニーランドにあるような造り物じゃないのか」と。すると「あっ、動いた。本物よ」と平川隊員が言い、

「当たり前だね」とみんな笑い出した。

野生のシマウマを見るのは初めてなので、感動この上無し。写真を撮ろうと近づこうとしたら、Gateの人から注意された。「シマウマは気性が荒いから近づいたら危険だ」と。

車から降りて地面の土を触る。土と言うより砂だ。赤くてさらさらしている。周りではやたらとトカゲが走り回っている。背中にギザギザのあるトカゲでまるで小さな恐竜だ。誰かがハタオリドリの巣を拾って持って来た。中園隊長が注意する。「公園内では生物やそれに関係するものを採ったりしては絶対だめなんだ。それに現地の人写真も承諾なしに撮ったらだめだ」

動物保護区や国立公園のゲートといっても、通り道に門があって、事務所があって、係官が数人いて、入園の手続きと入場料を払うのであって、門の両側から外は柵も何もないので、動物はもちろん人間も自由には入り出できる。しかし手続きは大変面倒で、規則も厳しいようである。公園内では、指定された地域以外の所を勝手に歩いたりしていたら、もしパトロールに銃で撃ち殺されても文句を言えないということで、運転手も大変気を使っていたようである。従って、車からちょっと降りてそこにある岩石を叩いてみたいと思ってもそれは出来ない。それでもやはり密猟者が絶えず、政府は苦勞しているようである。

手続きが終わり、いよいよ公園に入る。胸がwaku wakuする。道のあちこちに何やらでかい（直径20cm程）ものがごろごろしている。「もしかしたら……ジェームス、あれはもしかしてゾウのものか」と聞くと「そうだ」と言う。やはりそうだ。車を走らせながら辺りを見る。しばらくしてジェームスが叫んだ。「テンボー！」テンボーとはスワヒリ語でゾウのことだ。彼が示す方を見ると、ブッシュ（藪）の上に大きな岩のようなものが見える。そしてゆっくり動きだした。「ゾウだ。象だ。ゾウだ。ぞうだ。……ゾウだぞうだ」みんな思わず叫んだ。車を近くに寄せる。ここツァボ国立公園はゾウの王国として有名な所である。

数頭の群れだ。子どももいる。群れの中で一際大きいゾウがこちらを向いて耳を大きく広げ鼻を高く上げた。「パオオオッ」ゾウの鋭い声が大地を揺るがす。自分の体が震えるようだ。ゾウは母系家族で大きいのは母親だろう。確におっぱいも胸に2つ下がっている。映画でも見ているようだ。野生のゾウが目の前にいるなんて信じられない。

ツァボ国立公園はアフリカゾウの多いところで、約2万頭いるそうである。ここのゾウが「赤ゾウ」と呼ばれているのは、この地域の土が赤い（ラテライト）ため、

ゾウが土浴びをした時に体が赤く染まるからである。

ゾウはよく立木に体をすり着けたり、ぶち当たったりするらしい。大きな木の幹の皮がすり減ってしまっているものや、傷ついているものや、直径40cmもあるような木が斜めになって押し倒されそうになっているのなどよく見かける。

ツァボでは60種以上のは乳類、400種の鳥、23種のは虫類、700種の植物が生息しているとされている。夕方ロッジに帰るまでに沢山の動植物を見ることが出来た。ゾウの群れ（単独、つがい、つがいと子供1頭、数頭の群れ、20頭の群れ、40頭の群れなど様々である）、黒ゾウ（水飲み場の土が黒い、ゾウは1日に70リットルの水を飲む、水場はゾウの寝場所でもある。寿命は60歳）、

平隊員のメモに次のようなものがあった。

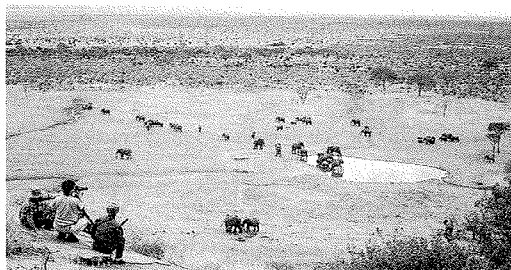
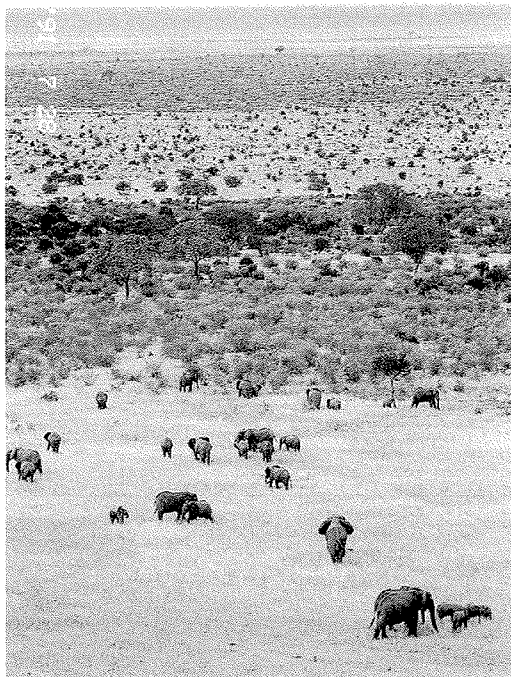
『バッファローの大群（約200頭）、ゼブラの群れ、グラントガゼル、トムソングゼル、オグロオナガモズ、ハゲノドシャコ、ホロホロチョウ、エジプトガン、セネガルショウノガン、ホオアカオナガゴシキドリ、カムリワシ、ヘビクイワシ、シュモクドリ、ブラックカイト、イエロービルトストーク、ナラブストーク、ハゲコウ、ハンマーコップ、グレーヘッドバスタード、シロガシラモズ、アカハシウツツキ（バッファローの背中にとまっている）、鳥類は、初めて見るような鳥ばかりで、名前も殆ど知らない、その都度専門の方に聞かなくても、なかなか難しい。

車を先にすすませる。今度はキリンが姿を現した。「うわあ、本物だ」興奮のあまり、またおかしなことを言っている。このキリンはマサイキリンと言う種類だ。トムソングゼル、ダチョウ……次々と動物たちが姿を現す。ここはアフリカ。野生の王国なのだ。』

午後2時55分、私たちは最初の小高い丘の上にあるロッジ（ボイ・サファリ・ロッジ）に着いた。東ツァボN.P.は広い割には宿泊施設が少ない。3食付きのロッジは、ここボイ・サファリ・ロッジだけである。この展望台からの眺めには強烈な印象を受けずには居れない。「広い」の一語につきる。まさに地球を見ているという感じである。遙かなたにヤッタ高原の台地が見え、そこまでは灌木の繁る広大な平原。灌木の間にゾウ達の群れが所々に、ゴマ粒のように小さくみえる。

すぐ前の岩場（片蕨岩）には、ハイラックスやイグアナが這い回り、崖の下の水場にはゾウの群れをはじめ、バッファロー、イボイノシシ、オリックス、インバラ、バブーンなどが入れかわり立ちかわり水を飲んだり遊んだりしにやって来る。時々ライオンも姿を現す。建物の周辺には真っ黒いフンコロガシが転がっており坂本隊員は採集に余念がなかった。

もうとっくにランチタイム（2時まで）を過ぎているので私たちは食堂に急いだ。食堂に入りテンボウ（象）いや、展望のよい場所に駆け寄った。そして、思わず息を飲み込んだ。



ボイ・サファリ・ロッジからの大パノラマ
赤い象が点々と見える

目の前には遥か地平線まで続く大パノラマが広がっているのだ。あまりの広さに声も出ない。まさに、広大な大地溝帯のサバンナのパノラマの中にあるゾウの群れは科学雑誌「ニュートン」に紹介された以上のものであった。水場には数頭のバッファローが水を飲んでいて、このままずっと動物たちや景色を眺めていたのだがそれもいかない。早く昼食を済ませることになった。食事はバイキング式で数多くの料理や果物が並べられている。食べ過ぎるのを心配して少しずつ皿に取るのだが、それ

でも皿はいっぱいになってしまった。なかでも、一番おいしかったのは焼き立てのパンだった。

この日の感想を、藤吉隊員は次のように記録している。
『昼食を急いで済ませ、展望できる場所に行く。ロッジからの見晴らしがとにかくすごい。ここのロッジは岩がむき出しの丘の上にあり、その前には広大なサバンナが地平線まで続いている。あまりのスケールの大きさに、自分が今ここアフリカに来ていることがまだ信じられない。「夢じゃなかろうか」と、だいぶのびた髭を引っ張る。「痛いっ。夢じゃない。アフリカだ！」子どもの頃から夢にまで見たアフリカだ。とうとう来たんだ。』

丘上のロッジ下に水場がある。

マサイ族の人たちがライオンより恐れているというアフリカン・バッファローが数頭水を飲んでいて、そしてバッファローが帰り出したちょうどその時、向こうからゾウの家族がやって来た。先頭にいるのは大きな母ゾウ、その次に成長した娘ゾウ、そして小さな子ゾウ（成長した娘ゾウの子どもだろう）をはさんで、さらに成長した娘ゾウ。子ゾウを守るように並んでいる。ゾウは母系社会。ゾウの家族は水場へ続く一筋の踏みわけ道を歩いている。同じ道を両側からゾウの家族と数頭のバッファローが進んでいる。互いがどんどん接近してきた。「いったいどうなるんだろう」緊張感が漂う、突然バッファローの集団が止まり、先頭の一頭が少し前に進んで立ち止まった。ゾウの家族はどんどん近づく、「どうするんだろう」心臓がドキドキ音をたてだした。しかし、バッファローはビクリとも動かない。

体の大きさは比較にならないほどゾウが大きい。母ゾウがバッファローの直前まで来た。その時、母ゾウが突然進路を変えて道から横へ反れた。そしてその後に家族が続いた。ゆう然と歩いて行く、そしてバッファローはじっと動かない。……野生でしか見れない動物たちの生きている姿がここにあった。

午後4時、荷物を部屋に運び終わり、いよいよ明日のサファリのため下見にでかける。ロッジを出発し、車を走らせてまず気づくことは、鳥が多いことだ。

隊員の中には野鳥の会の会員も多く、坂梨隊員、高野隊員、田畑隊員などははしゃぎっぱなしだった。他の動物達も当り前のように次々と姿を現す。ゾウ、ゼブラ、マサイキリン、アミメキリン、トムソンガゼル、インパラ……運転手のジェームスが何かを見つけた。

彼は車のスピードを落しはじめた。すると灌木の先に黒いかたまりが見えはじめた。なんとそれはバッファローの大群なのだ。その数約170頭。バッファローを興奮させないように車を近づける。数十メートルに近づいたとき、大きなバッファローが私たちの方に体を向けた。背

中にはウシツツキが乗っている。そして他の数頭もこちらを向いた。突進されたらひとたまりもない。みんな声を小さくしている。カメラのシャッターの音だけが妙に大きく響く。そしてまた静かに車を動かし、そこを離れた。6時になったところで「今日のサファリはこれで終わり」とジェームスが言った。

午後6時10分ロッジに帰着。サファリは6時までには終わるようになっていく。ロッジの気圧939mb, 気温25℃, 湿度76%, 7時30分より夕食。ワインを飲んでほろ酔い。パン、チキンクリームスープ、牛ステーキ、人参のクリーム煮、ポテトフライ、サラダ、ケーキ、紅茶 or コーヒーとご馳走が有りすぎて食べきれないほど。中園隊長が「肉はよく火を通すように」と注意をしていた。寄生虫の心配があるのだ。生野菜もみんな敬遠している。それぞれが食事に気がつかっているが、これから先はまだ長い。この日のミーティングでは、みんなの体調を考えて、明日からビタミン剤を配給することになった。

食後、シャワーをしようとしたら、二人目からお湯が出なくなった。ここでは水は貴重だし、ましてやお湯なんて贅沢なのだ。シャワーを浴びて床に就いたが、ともかく感動と感激の1日であった。まだ、たった1日目である。この後2週間もサバンナを駆け回ったら、いったい頭の中はどうなることかと、ちょっと複雑な気持ちになりながらも、気を引き締めなおして眠りについた。

7月28日

朝6時起床、8時20分、サファリに出発。昨日の下見でここにはゾウが多くいることがわかった。今日は少し遠くまで行くことにした。今日もやたらと鳥が目につく。とにかく種類が多く、そして大型の猛禽類もかなりいる。

ジェームスは川の方へ車を走らせた。川のほとりに来ると、赤や黄色の花をつけた木がありチョウが舞っている。車を先に進ませると、チョウの数がどんどん増えてきた。モンシロチョウの仲間だろう。他にも何種類かのチョウが群れている。ここはまさにチョウのパラダイスだ。川の水はツァボの赤い土をとかし、赤く濁っている。

車は再び草原に戻る。草原を見渡すとアカシアに木の上によっきり突き出したものがある。キリンだ。不規則な模様をしているからマサイキリンだ。車で近づくと他に数頭いることが分かった。おそらく家族だろう。キリンの顔は表情がとてもやさしい。

ハーレムと呼ばれるインバラの群れが見える。オスだけに角があり、このオスは実に美しい壺琴のような形の角を持っている。後ろから見るとお尻の白地に黒い線が3本「川」の字に並んでいるのですぐに見分けがつく。

インバラの群れは、1頭のオスが20頭程のメスを引き連れていている。

シマウマも姿をみせた。ウマと呼んでいるが、実はロバの仲間である。

朝のサファリを終えて、ロッジへ帰る。ロッジに着くと、下の水場には40頭程のゾウが水を飲みにあつまっていた。そして大型のレイヨウの仲間、ウマくらいの大ささのエランドもいる。

昼食を済ませ、夕方までしばらく休息を取る。サファリは一日中するわけではない。動物たちが活発に活動する朝と夕に時間を決め、目的を持ってするのだ。真昼の日差しはかなり強いが風がさわやかでとても心地よい。ロッジの庭に腰を下ろし、限りなく広がるサバンナを、頭の中をからっぽにして眺める。なんてぜいたくな時間の使い方だろう。正直言って、このとき、日本にいる家族の事や仕事のことなどまったく忘れていた。

午後4時、サファリに出発。草原の中を何者かが走っている。草の上にピンと突き出したしっぽが見える。イボイノシシだ。しばらく行くと灌木があり、車はその間をゆっくりと進む。突然ジェームスが車を止めた。「何かいるのか」と聞くと、声を小さくして「ディクディク」と言う。「ええっ、ディクディク!」と大声を出してしまった。灌木の陰にじっと身を潜めているディクディクが見える。一番小型のガゼルの仲間、体の大きさは30cm程だ。目がとっても大きくてかわいい。

灌木がまばらになってきた。向こうで木が揺れている。車をゆっくり近づける。ゾウだ。少し離れた所にキリンも見える。シマウマ、グラントガゼル、インバラ、バッファロー……次々と動物たちが見える。

夜のミーティングで、明日デイボゴさんが共同通信社の女性記者で、私達の「アフリカ自然探訪」を取材することになっていた。三好さんを連れて来ることが知らされた。

7月29日

朝6時に目覚める。今日は6時30分から早朝サファリだ。急いで身支度し、観察機材をかついで部屋を飛び出す。ロッジを出てすぐの所でジェームスが車を止め、道端を指さした。そこには10cm程の丸い足跡がある。「シンバだ」と言う。シンバとはスワヒリ語でライオンのことだ。「ライオン!」驚きで眠気がふっ飛んだ。ケニアに来てまだ一度もライオンを見ていないが、確かにいるんだ。しかもこんな近くに。「ゆうべここをシンバが通ったんだ」とジェームスが言う。少し行くと突然キリンが右手に姿を見せた。マサイキリンだ。ゆっくりと目の前を横切り、立ち止まってアカシアの葉を食べはじめた。

アカシアの枝にはつまようじ程の長さの鋭くとがったとげがたくさんついている。キリンはそのとげだらけの枝に長い舌を巻きつけ、しごくようにして葉を取って食べているのだ。痛くないのだろうか。とても信じられない。昨日アカシアのとげをさわって飛び上がるほど痛かったというのに。

この日は他にシマウマ、バッファロー、インパラ、グラントガゼル、ゾウ、エランド、鳥（種類が多すぎてとても書けない）を見ることが出来、オリックスがはじめて姿を現した。

そして、私達はバッファローの死骸を見つけた。「シンバにやられたんだらうか」と言うと、「たぶんそうだ」とジェームスが言った。

午前9時、朝のサファリはここまで、ロッジに帰る途中、2号車が止まった。そしてみんなが車の屋根から体をのり出すようにしてカメラを構えだした。「何かいるぞ！」すると長尾隊員が叫んだ。「セクレタリーバード！」和名ではヘビクイワシと呼ばれている鳥だ。車を止めた。草原の中に足のすらりと伸びたスマートな鳥が見える。頭にはインディアンの羽飾りのような冠羽がある。ヘビクイワシは翼を広げ、大きく上下に動かしながら走りだした。私たちも車を動かし後を追ったが、すぐに飛び去ってしまった。

みんなの表情はとても明るい。このロッジに3泊の予定であったが、ここでまたハプニング。今日の日程やそれぞれの役割を確認していた時だった。中園隊長がロッジのマネージャーと呼ばれた。部屋の前で話している声が聞こえるが、声の調子が違う。「何かあったのだろうか」部屋の中のメンバーにも緊張感が漂う。中園隊長が部屋に戻ってきたが、表情が険しい。

「ダブルブッキングだ」次の客（白人）はもうドアの外に来て待っている。

私たちのグループと別のグループと予約がだぶっていた。しかも私たちに別のロッジに移るように言っているらしい。中園隊長が「今からロッジ側と交渉する。絶対にカギを渡さないようにして、部屋で待機するように、結果は交渉が済み次第する」と告げ、渉外係の松岡隊員と共にロッジの事務所へ行った。

大変なことになった。メンバーの中には「我々が東洋人だから白人を優先してるんじゃないのか」という声もあった。ともかく二人にすべてを任せて、私たちはそれぞれの部屋で居座ることになった。それに旅行社のディボゴ氏もこちらに向かっているらしい。

部屋にもどればしばらくした頃、ディボゴ氏と一緒に三好さんがロッジに到着した。12時45分。再び集まり、中園隊長から交渉結果が知らされた。「ナイロビの事務所

の手違いがあったようだ。私たちのミスではないので留まることも考えた。しかし、イタリア人のグループも来ているし、この事態をなんとかしなければならぬ。ロッジのマネージャーは私達にキラグニロッジを予約したといっている。もし予約が確認できれば移動したいと思うが、みんなの考えはどうだ」みんなも了解した。ディボゴ氏が先に行き確認してくれることになった。ひとまず問題解決となったが、このハプニングでの中園隊長の苦勞は大変なものだった。体のとても大きなロッジの支配人の迫力に負けまいと、断固とした態度をとり、食いが下がった、しかも英語で2時間も、さすがの中園隊長もヘトヘトだった。

三好さんの紹介が済み、ミーティングは終わった。ロッジの予約が確認できるまでは部屋を確保しなければならない。交替で昼食をとることにした。昼食を済ませ、しばらくの間ロッジからの眺めを満喫した。水場には入れ替わりゾウがやって来て、自然のままに生きるゾウの観察はとても楽しい。水浴びや泥浴びなどの様子をゆっくり見ることができた。

13時20分、ロッジの予約の確認が取れ、キラグニロッジへの移動が決まった。荷物をまとめ14時30分にチェックアウト。キラグニロッジまでは150kmあるという。車に乗り込み、サバンナの中の道を進む。「きゃあー」突然、平川隊員が悲鳴をあげた。なんと、車でデイクデイクをひいてしまったのだ。動揺している私たちにジェームスが「他の動物の餌になる」と言う。私たちは後ろを振り向きながら言葉がなかった。さらに車は走る。

16時10分、やっと西ツァボのメインゲートに着いた。車が止まるとすぐに現地の人たちがみやげ用の木彫りを持って集まってきた。「車から出たら大変だな」と思い、車の中で通過チェックが済むのを待っていると、木彫りを持った手が次々と窓越しに車の中に入れられてくる。「いらぬ」と言うが、なかなかあきらめてくれない。

やっとチェックが済み、西ツァボ国立公園内へと車は入って行った。

ツァボ・ウェストN.P.のゲートをくぐると、またいろいろな動物と出会う。アフリカハゲコウ、シラボシコゴシキドリ、カマハシ、クロオウチュウ、シロハラハイロエボシドリ、オグロオナガモズ、サイチョウ、シユライク、カンムリショウノガン、コシジロウタオオタカ、エボシドリが見えた。

シマウマ、イボイノシシ、サバンナシマウマも姿を見せ、アカハシウシツツキがインパラの背中に乗って背中の虫をつついていた。しかし、東ツァボに比べると、動物の種類も数も少ないように思えた。それにサバンナの

草もそれほど密生していない。動物たちの糞も少ない。特にあの巨大なゾウの糞が見あたらなかった。

ユーフォルビア、テーブルトリー（アンブレラアカシア、アンブレラツリー、ソーントリーなどとも言われるアカシアの木で、サバンナ独特の風景を作っている）等を見ながらロッジに着いた。出発から約3時間かかった。

サファリを楽しみながら、17時45分にキラグニロッジに到着した。ロッジに着くや、みんなから歓声が上がった。悪いことが有れば、良いことも有る。不満ながら前のロッジを追い出されてやって来たこのKILAGUNI RODGEはまたすばらしい所であった。木々に囲まれ、色とりどりの花に包まれた、萱ぶき風のとてもすばらしいロッジであった。本来なら泊まれないはずのロッジなので、トラブルに感謝している者もある。ロビーに入ると、我々によく似た顔の人達がいる。思わず日本からのグループだと思い、近くに行くと、なんと言葉が違う。彼らは韓国の人達だった。建物、設備ともに豪華。食堂とテラスが一緒になっているので、一杯飲みながら動物達を眺めることが出来る。とは言っても、こちらでは人間と動物は常に逆の立場であって、我々がいつも檻の中に居るようなものであるから、彼らが、ここにはいつも変な動物が集まって来るなどと思って、ロッジの周りにやって来るのかも知れない。

宿泊の部屋は別棟にある。荷物を部屋に運び終わり、ベランダに近くの部屋のメンバーが集まった。部屋の裏は灌木が茂り、はるか彼方にはアフリカの最高峰キリマンジャロがかすんで見える。夕日が西の空に沈みはじめる頃は雄大ですばらしい眺めだった。

ベランダの近くにはハイラックスがたくさんいて、平気で私たちに近づいて来る。坂田隊員はアーモンドを持ってきて、小さく砕いて裏庭にまいた。周りから鳥たちが一斉に集まった。しかし坂田隊員は「痛い！」と悲鳴をあげるはめにもなった。なんとハイラックスに餌をやるうとして、指までかじられた。みんな心配しながら笑いをこらえている。灌木の間を動くバッファローが見え、その向こうにはウォーターバックも歩いている。「こんな近くに動物がいて大丈夫かな」と思ってしまう。

夕食の時間になり食堂に集まると、食堂の前のテラスには、すばらしい眺めが広がっている。日も沈み、ロッジのスタッフがテラスの前に餌を投げると、すかさず動物がやって来た。「ジェネットだ！」「いやいや、あれはネコだ」などと言っていると、今度はシマハイエナとホワイトテールマンギースがやって来て、餌をめぐつてにらみ合いを始めた。アフリカに来てはじめて見る動物が次々と現れる。夕食を食べていると「ライオン！」と、ロッジのスタッフが叫んだ。みんな食事を止めて立ち上

がり、外を見ようとテラスに駆け寄った。先の方に池があり、ライトがその付近を照らしている。「いたっ、あそこだ」ライトの光でライオンの姿が浮かび上がった。みんなはじめて見る野生のライオンに興奮しだした。双眼鏡で見るとさすがに迫力がある。と同時に、「こちらへ来たらどうしよう」という緊張感もあった。ライオンは数頭来ていた。子どものライオンもいる。夕食もそこにライオンの観察が始まった。ライオンがヌーを追いかける場面もあった。

9時25分、ミーティング。中園隊長が今日のハブニングに触れながら「あまり予定通りにいくと面白くない。エキサイティング、スリリング、これがアフリカの醍醐味だ。今日はむしろラッキーだったと言える」と話される。みんなも中園隊長の話にうなずいている。「このロッジに来てよかったあ。ライオンも見れたし……。さて、明日の午後は次の目的地アンボセリ国立公園に移動だ」と嬉しそうだった。

7月30日 バオバブの大木にゾウは穴をあける

夜が明けると、ずっと向こうに、キリマンジャロの白い頂がみえる。朝食（スクランブルエッグ、ポテト、トースト、パン、バナナ、グレープフルーツ、紅茶）を済ませた。ロッジの周辺を歩いて、大きな片麻岩のブロックの上を、頭がピンクで胴体が青というきれいなイグアナ（体長30cm）が何匹も走り回っている。木の枝の先には、ハタオリの巣が無数に垂れ下がってゆらゆら揺れている。噴火口のはっきり見えるきれいな火山が見える。

朝6時30分、サファリに出発。しかし、ただしメンバーの一部はロッジに残り、ロッジの周りの動物たちを撮影することになった。

サファリ組は車で出発した。途中バオバブの木に大きな穴があいているのを見た。ジェームスが「10年程前の干ばつのとき、ゾウが水を補給するためにあけた穴だ」と、説明してくれた。キリマンジャロ（5895m）がくっきりと目の前に姿を現した。マサイ語でキリマンは「山」、ジャロは「高い」と言う意味だそうだ。頂には白く雪が見える。ウィーバーバード（はたおり鳥）の巣の数を途中で数えたら一本のに全部で106個もあった。

10時、ヒポ（カバ）が見られるムジマ・スプリング（ムジマとは元気という意味）に到着。「元気のでる泉ということだろう」銃を持ったレンジャーが数人立っている。ここは、歩きながら観察ができた。しかし、もちろん危険はある。公園の入口には注意書きの看板があり「一人では歩かないこと。かならずグループをつくること……もし、動物に襲われても個人の責任であること」などが書かれている。緊張しながら、旅行社のピンセン

ト氏に案内されて公園内に入った。ここはムジマ川の水源で、とても澄んでいて豊富な水が湧いている。アフリカに来て、濁った川ばかり見てきたのでこの水の美しさは驚だった。水があるので周りには樹木が多く、林になっている。種類はほとんどアカシアだ。アカシアは種類も多く、マサイ族の人々は薬としても利用しているとビンセントさんが言う。突然「ブオーッ」という音と共に水面に水しぶきがあがった。カバだ。水が澄んでいるので、水の中にいるカバもよく見える。自然の中で、しかもこんな美しい景観の中にあるカバは見たことがない。私の頭の中にある動物園のよごれて元気のないカバのイメージを、このカバが壊してくれた。まさにここはパラダイス。

クロコダイル(ワニ)に注意という看板もある。川の中に突き出た小屋がある。橋を渡り小屋の中に入ると、中は壁がガラス張りになっていて水の中が見えるようになっていた。そこにはすばらしい世界が広がっており、たくさんの魚が泳いでいるのが見える。フナによく似ている魚で、かなり大きいものもある。長尾隊員が「この魚たちがカバの糞を処理しているんですよ」と説明していると、水の中を黒くて細長いものが泳いでこちらへやってきました。ヘビウだ。ヘビウは水面に出ている朽ち木に枝に上がり、羽を広げて日で乾かしはじめた。また、川辺の林にはたくさんのベルベットモンキーがいて、私たちを恐れる様子もなく、すぐ近くまできて遊びはじめた。

1時間程観察を楽しみ車に戻った。もっとしばらくこの場所にいたかった。それくらいすばらしい所だった。11時30分、ロッジに帰り着いた。

アンボセリ国立公園へ

13時30分、キラグニロッジでの最後の昼食を済ませ、思い出深いこのロッジに別れを告げ、次の目的地であるアンボセリ国立公園をめざして車を走らせた。私達はサファリを楽しみながら車を走らせた。

「アンボセリ」とはスワヒリ語で「誇りある地」という意味である。

予定では途中マサイ村に寄ることにしている。この村は観光用の村で、入場料は一人10ドルになっているらしい。政策に反し、公園内に生活するマサイ族には国からの援助がなく、この入場料収入などが役にたっているらしい。入場するかどうかは現地に着いてから交渉の上で決めることになった。

途中の木の上や地面にいろんな鳥がいる。マミジロスズメハタオリ、ハジロハクセキレイ、ムナジロガラス、アフリカヒヨドリ、ツバメなど。トカゲも出てきた。

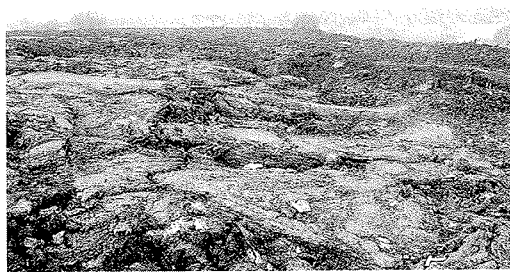
西ツァボ国立公園のゲートを出るとき、また手続きに

時間がかかった。そこで、みんな車から降りて、近くを散策することにした。道路沿いには溶岩がゴロゴロしている。岩石が積まれている場所があった。

岩石のこととなれば平隊員の専門だ。岩石の種類などについて説明がはじまった。歌岡隊員が灰色の石を見つけ「これ何という種類の石なんですか」と聞くと、「うん、……これは……すごいですよ。おそらく6億年以上前の片麻石でしょう」と言われた。6億年以上も前と言えば先カンブリア時代の頃になる。「ええっ、6億年前」それまで暇つぶしでながめていたみんなの目の色が変わった。「歌岡さん、その石どこにあったと」「その石を半分に分らんね」などと言いながら、宝探しがはじまった。その横では長尾隊員が夢中でチョウを追いかけている。みんなそれぞれにそれらしき石を見つけて満足し、安心して車に乗った。

ここからしばらくはセキュリティー(レンジャー)が車に同乗することになった。タンザニアとの国境に近く、密猟者が出て危険なのだそう。こうしてようやく出発となった。

車でしばらく進み、丘を登りつめた所で車を止めた。まわりは見渡すかぎり溶岩だらけの地形に変わっていた。ここは『『サタンラバー』と呼ばれる所だ』とジェームスが言った。まさに地獄を思わせるような不毛の大地が広がる。



300年程前の溶岩地帯は生きている大地を実感させる

ものすごいラバ・フロー(SHETANI LAVA FLOW)を見た。玄武岩の溶岩である。草も殆ど生えていないし、だらだらと流れた後がよく見え、荒涼たる黒の原野が広がっていた。

平隊員が遠くの山を指さして「あれがトール火山でしょう。この溶岩は、あの火山が300年程前に噴火した時に流れ出たものです」と話された。アメ状に固まった溶岩を調べていた長野隊員が「これを見て」と言うので、行って見てみると、溶岩の表面に小さな地衣類がついている。はるか昔、生物が大地に根を下ろしはじめた頃の地球の様子をかいま見る思いがした。北田隊員は大切そ

うにそれを採取した。

再び車で出発する。溶岩地帯を抜けると、今度は大地に深く刻まれたくぼ地の中を車を進んだ。粒子の細かい砂のような土にハンドルをとられながら、もうもうと土塵をあげて車は走る。視界はほとんどきかない。車は大きく前後左右に揺れる。みんなゴーグルや防塵マスクをつけたり、あるいはタオルで鼻や口を覆っている。みんな互いに顔を見合わせ、なんともおかしな格好に笑いをこらえている。

まるで銀行強盗団そのものの風体である。「爽快な空気を吸える先頭の1号車がうらやましい、いや恨めしい」と天野隊員は必死でシートにしがみついていた。私たちは同じようにシートにしがみついてデコボコ道に耐えた。ようやく周りはサバンナに変わってきた。



サファリスタイルの見本？ 左:長尾隊員 右:坂田隊員
カメラの防護も大切です

しばらくすると辺りには点々とマサイ族の集落が見えてきた。ウシの群れも見える。ロバや犬もいる。マサイ族の男達の姿も見える。赤い布を身にまとい、体は細くとても背が高い。みんなとても精敢な顔をしている。マサイの村は円筒形の家が十数戸円を描くようにならんでいて、内側が庭になっている。そして、家と家の間にはトゲの鋭いアカシアの木が積み上げられ垣根になっていた。ライオンなどの外敵から守るようになっている。家の壁はウシの糞を塗り固めてあると聞く。子どもたちの姿もよく見かける。みんな真っ白い歯を見せて笑顔で私たちに手を振ってくれる。「目」が非常にきれいだった。そして自転車に乗っている人もいる。文明の波はこのマサイ族の人々の生活も変えているのだろう。

集落のまわりにはほとんど草がない。ウシなどの家畜が食べ尽くしてしまったのだろうか。

写真撮影はこの村でしか出来ない。マサイ族の人々は自分たちの生き方に誇りをもっている。だから彼らは観光客がやたらとカメラを向け写真を取るのを拒むのだそうだ。ピンセントさんが「マサイ族の人にカメラを向けたりが飛んできて、それはあなたたちが悪いのです

よ」と言った。出発前に中園隊長も「現地の人たちを許可なしで写真撮影してはいけないんだ」と言っていた。私たちの車がとまると、スラリと背の高い2人のマサイの男が私達の方へやってきた。ピンセントさんが交渉をし、見学することが決まった。

マサイの女性たちが十数人出てきて私たちを迎えてくれた。それぞれにビーズ等で作った首飾りや腕輪等を身につけ飾っている。そのはでさと美しさに圧倒されてしまった。さらに、彼女たちは、横に並び私たちに間に入れて、体でリズムをとりながら歌を歌い始めた。歓迎のセレモニーだ。彼女たちは底抜けに明るい。私はほとんりのマサイの女性からウシのシッポのついた棒とヤリを持たされ、意味はまったくわからないが同じようにまねて歌い、リズムに合わせて体を動かした。とにかくこの歓迎には驚いた。恥ずかしいと思う余裕もなかった。セレモニーが終わり、みんなで記念写真を撮り、それから20分程ここで見学することになった。



マサイ族の村での歓迎式。ここからはアフリカ最高峰のキリマンジャロ(5,895m)が見えた

家で囲まれた中庭はかなり広がった。マサイの男性がヤリを買わないかと私たちにすすめる。すると、横から別の人が細長い棒のようなものをみせた。それはマサイのナイフだった。藤吉、松浦隊員は女性から、家の中に入るようにすすめられ中に入った。入口を入るとすぐ壁があり、その壁を回り込んで中に入れるようになっていた。後から藤吉隊員は次のように話してくれた。

「中は真っ暗だった。小さなランプの明りでなんとか中の様子がわかった。中央の囲炉裏の横に腰を下ろすと、彼女たち自分の腕輪をはずし、私たちの腕にはめた。そして、やっとわかった。つまり、これを買わないか、ということだった。ここでの買物は予定していなかったのだから、いけない、と言うのだが、次々に別の物をだしながらすすめた。とにかく断わるのに苦労した。私は彼女たちのおおらかさとともにねばり強さも感じた。そうでなければこのサバンナでは生きて行けないのだろう」と。



村からはキリマンジャロの美しい姿が感動を呼ぶ

集落の裏には、キリマンジャロ（標高5,895m）、アフリカ最高峰が優しくこの村を見おろしていた。乾季の折り、草と水を求めている大変さがこの村ではうかがえられた。しかし、時間に追われてバタバタと疲れきった毎日を送る我々と比較して、悠然とした生活を送っている彼らの方が豊かではないかとも思う。

17時30分、私達はマサイの人達に別れを告げ、マサイ村を出発した。

18時、アンボセリ国立公園のゲートに着いた。ここでも近くに住んでいる人達がみやげ物を持って売りに集まって来た。ここでマラカイトという緑色の美しい石でできた腕輪を初めて見た。平川、北田隊員はそれをとても気に入って、100シリング（500円）で買っていた。後で、みんなの間で「これはいいなあ」と話題になり全員買ってしまふ。

日没後は車は走れないのだろう、レンジャーがそれぞれに乗り込んで来た。

夕暮れの空にキリマンジャロ山がかすんで見えた。そして、草原には黒い点が無数に広がっている。「ヌーだ！」大群である。アフリカに来てぜひ見たいものの一つに「ヌーの大群」があった。見渡した範囲だけでも数千頭はいるだろう。だんだん全員興奮し、明日のサファリがとてもwakuwaku楽しくなった。

6時50分、キリマンジャロ・ロッジに到着。

3時間ほど車を走らせ、アンボセリN.P.内のキリマンジャロ サファリロッジに着いた。小さなロッジのドアに入り、後ろの窓の外を見ると、アフリカ大陸の最高峰、キリマンジャロの全容が、くっきりと浮かんで見える。夢にまで見たキリマンジャロの銀色に輝く麗峰を目の前にしたとき、何か胸にじんと来る思いがした。

国立公園の広さは3200km²（ほぼ神奈川県の広さ）。ヘミングウェイが「キリマンジャロの雪」を執筆したところとして有名である。キリマンジャロの頂上は、実はタンザニア側であるけれども、アンボセリの方から見た眺めが一番美しいといわれている。ロッジの売店を何気な

く見回していたら“HEMINGWAY：THE SNOWS OF KILIMANJARO”の見出しの単行本が安くて有ったので（日本円で50円くらい）1冊買って来た。

アンボセリは、キリマンジャロの噴火による火山灰で覆われているため、土の色は白っぽくて、地表面は乾燥し、アカシアと灌木がところどころに生えている、典型的な乾燥サバンナである。しかし、キリマンジャロから流れ出る水が伏流となり、平原の地下水面も割合高く、低地の湿地帯を常に潤しているため、動物の棲息も多い。夜になると何処からともなく聞こえて来るライオンの吼え声を聞きながら眠りに就くことが出来る。

もうすであたりは暗くなっていた。部屋が決まり荷物を運び込む。部屋は独立した丸太でバンガロー風の小屋になっている。

7時30分から夕食が始まった。天野隊員はお腹の調子が悪いらしい。旅も中盤にさしかかり、メンバーの中には体の不調を訴える人も出て来た。

ところが、体の不調などどこ吹く風、夕食の楽しみはビールだ。とにかくケニアではビールが安いくてうれしい。ここではビールが一瓶30シリング（150円）、水が90シリングだった。飲み水は貴重で高価であった。キリマンジャロのわき水は最高の水に思えた。

食事の後、マラリアの予防薬が配られた。マラリアの薬は1週間置きに飲まなければならない。出発してからちょうど1週間経ったことになる。夕食が済み、9時30分からミーティング。

しばらくビールを飲んでくつろいでから部屋に戻る。ベッドの上には天井からまるで投網のような蚊帳が吊されている。そういえばさつきから蚊がいるのが気になっていた。マラリアの予防薬を飲んでいるから大丈夫とは思いますが、念のため日本から持ってきた蚊取線香をは実によく効いた。



夕方のサファリが終わり、メルヘンのような世界を帰路につく1号車と2号車

7月31日

「もう朝ですよー」例によって右手にハブラシを持っ

た坂田隊員の声で全員目がさめた。夜は寒いくらいだった。

6時30分、玄関に集合するが、まだ外は薄暗い。三台のサファリカーはすでにエンジンがあっただまっている。空気はとても冷たい。さあ、早朝サファリに出発だというところで、共同通信記者の三好さんが「カメラが壊れちゃったんですよ」と言う。「世界のニコンだよ、まさか……？」おそらく昨日車で悪路を移動した時壊れたのだろう。カメラがなくては記者として仕事にならない。そこで藤吉隊員のカメラをまわし、藤吉隊員はビデオ撮影グループに加わった。

ロッジを出ると、すぐにインパラと同じ仲間、ヌーが見えてきた。やはり大群だ。しかし、一カ所に集まっているのではなく、見渡すかぎりの広い範囲に散らばっている。それにしてもかなりの数だ。あとで聞いた話では、この付近に今いるヌーの数は約2万頭で、全体では約100万頭を越すらしい。どのヌーも立ったままじっと動かない。おそらく夜のかかなりきびしい冷え込みで体が冷えきっているのだろう。しかし、壮観であるには違いがなかった。

ヌーの通るところにはきちんと道ができていた。しかも、道路を横断するときにも道を変えない。これも安全のためである。獣道である。この獣道を撮影していると他のサファリカーが続々集まってきた。何かと尋ねてくるのでおかしくなってみんなで笑ってしまった。左にヌーの群れ、右を見ると雪をいただいたキリマンジャロ、その手で草を食べるヌー……絵になった。

気がつくと、あちらこちらで地面が白くなっているのが見えた。塩の結晶だった。近年ここでは塩害がひどいらしい。そして、中央にみえる湖は塩湖だという。しばらく車で走るとブチハイエナが集まっているのを見つけた。どうやら何かを食べているようだ。車を近づける。獲物は子供のヌーだ。その周りではハイエナを囲むようにしてハゲワシたちが集まっていた。ヌーは肉食動物にとって大切な食物になる。ハイエナはその強靱なあごで「ガリガリ、パリパリ」と骨までかじりながら食べている。その音がまたすさまじく朝の空気を震わせる。これも、高野隊員が言った「これもアフリカなのだ」「This is AFRICA!」そのものであった。

ここでは、美しい色鮮やかな布をまとったマサイ族の男達が2人、3人と長い槍を持って狩りに出かける姿をよく見かける。

ヌー（ウシカモシカ・2万頭の群れ）、シマウマ、ゾウ、ブチハイエナ、インパラ、キリン、チータ（2頭、初めて見る）、オウカンゲリ、オウカンゲリ、シロクロゲリ、ミミヒダハゲワシ、マダラハゲワシ、コシジロハ

ゲワシ、ソウゲンワシ、カオジロハゲワシ、シロエリハゲワシ、クロトキカンムリズル、ホオゾロカンムリズル、クロトキ、ズグロアオサギ、アマサギ、アオサギ、ゴイサギ、ハゲノドシャコ、エジプトガン、ダチョウ、エボシドリ。etc こんなことがメモに残っている。

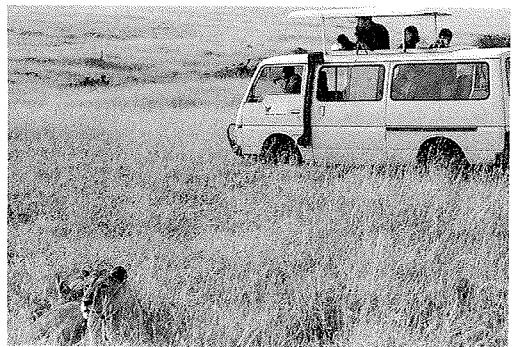
マサイ・マラ動物保護区（8/2～5）へ

昨夜一度ナイロビへ引き返して、今朝（2日）また西へ向かって出発。車が一度西へ向かったら、何時間もその方向は変わらない。ナイロビは人が多い、車が多い、建物が多い、近代的な大都市である。ガソリンを満タンして（ガソリン72円/リットル）

目的地はマサイ・マラのキャンパスサイト。ちょうど50分くらい走ったところで、突然物凄い溶岩の路頭が現れる。これこそグレート・リフト・バレー（アフリカ大地溝帯）の断層崖の一端である。しばらく車から降りて、写真を撮ったり石を拾ったりする。さらに急な坂を降りて行くと、眼下に広大な陥没地形が広がって来る。私たちは大地溝帯、そのものへ、地球の割れ目に向かって一目散に降りて行った。

マサイ・マラ動物保護区はナイロビの西南西約260km、タンザニアのセレンゲティ国立公園と国境線で隣接した位地にある。面積は1800km²（大阪府とほぼ同じ）。野生動物の多いことではケニア随一と言われ、ヌー、シマウマ、ガゼル、バッファロー、ゾウなどの大群を見ることが出来る。映画やテレビに出て来る、あの迫力のある野生動物の姿、ヌーの大群が大量の犠牲を出しながら濁流をわたるあの姿などは、殆どこの地で撮影したものということである。

マサイ・マラではクレーターやきれいな火山、断層による絶壁、大草原、とグレート・リフト・バレーの大景観を眺めながら、4日間走り回り、いろんな物を見ることが出来た。



マサイ・マラでヌーやシマウマの大群をうかがうメスライオン

ライオンの狩り。そしてバッファローを内臓を食らうシーン。それを物欲しそうに側で見ている数頭のブチハイエナ。ハイエナが引っ張って行く獲物をハゲワシが横からちょっかいを出して盗ろうとすると、そしてハイエナから追い払われる場面。雄ライオンと雌ライオン3頭で8匹もの赤ちゃんライオンを遊ばせている場面。ライオンに道を塞がれて先へ進めなかったこと。チーターが、今捕ったばかりのトムソンガゼルを口は血だらけになって、夫婦で仲良く骨までガリガリ食べている場面は、彼らがまさに補食者であることを脳裏に焼き付けさせられた。川の中でゆったり遊んでいるカバやワニ。ウォーターバックの雄どうし角突き合わせた順位争い。インバラのハレム。サイのつがいの雄姿などなど……。

「…これがアフリカなのだ」「…This is AFRICA!」と心で呟きながら全員我を忘れてビデオカメラを回し、カメラのシャッターを押し続けた。

ここでの5日間のキャンプ生活もまた楽しいものであった。キャンプといっても、4人のスタッフがいつも付いていて、料理はもちろん、テントを張ったり、近くのロッジへビールを買いに行ってくれたり（近くといっても車をとばして帰って来るまで1時間はかかる）、何でもしてくれるので楽なキャンプである。

この4人のスタッフはマサイ族だった。マサイ族と言えば男たちは勇猛果敢な戦士として有名であり、またそれを誇りにしている。背が高くてからだつきも精悍でだし、ライオンを槍1本で何頭しとめたというのが彼らの自慢である。そして大変やさしい。

しかし、残念なことに「一緒にテーブルで食事をしませんか」と誘ってもとうとう最後までそのことは実現しなかった。彼らは寡黙でよく世話をしてくれたし、目が合えばにっこりして親しみ深く思い出に残る人たちだった。

近所に住んでいる、女性たちは非常におしゃれで、娘さんたち、手作りの首輪や腕輪、ネックレス、イヤリングなどいっぱい身につけて、テントの近くに集まって来る。身につけた物を一つ一つはずして、これを買わないかと遠慮がちに近づいてくる。これまた値段のやり取りが面白い。

小さな川（岸にはきれいな結晶片岩の路頭が見える）の横の草っ原に、小さな草葺きの小屋が1つ建っていて、これが料理場である。それに水タンク、シャワー小屋。トイレは深い穴を掘ってその上に便器を置き、チャック付きの囲いをして有る。灯りはランプだからこれまたなかなか趣がある。この広い草っ原に塵一つない。しかしやはり水は足りない。洗面器1杯で3人顔を洗う。貯めてある雨水や川から汲んで来て有る濁り水を洗濯などに使うけれどもこれも充分ではない。

隣のテントにはフランス人の若い夫婦が泊まっている。自分達で料理し、シャワーの水なども用意してきて、何でも手慣れたものである。トヨタのサファリ・カーを使っているし、彼らのテントもメード・イン・ジャパンであった。

夜は冷える。気温は13℃まで下がるので寒い。スタッフのうち誰か必ず一人起きていて、一晩中火を焚いている。これは猛獣避けでもあるらしい。すぐ横の川にはワ



ウォーキングサファリの途中巨大なアリ塚の前で、護衛のレンジャー(中央)と、この直後雨にみまわれた



意外と安全なテントサイト。後方に川があり対岸は緑豊かだった（マサイマラ）



キャンプ場での夕食、夜は急速に冷える

ニが居るかもしれないし、事実、カメは1匹テントの横までやってきて翌朝みんなのベット扱いの歓迎を受けた。

晴れた夜は星空がきれいである。南十字星も見える。オリオンも、かにも、ふたごもししも。遠くで猛獣の声が聞こえる。それがしじまの静けさをさらに静かにする。

平隊員は、アイザック・ディネーセン原作「アフリカの日々」の映画「愛と哀しみの果て」のロバート・レッド・フォード、メルル・ストリーブの名場面を思い出しながら眠りについたそうである。しかし梅干しと味噌汁の夢を見た隊員も当然一人や二人ではない。

ナクル湖国立公園（8/6）

平隊員のfield noteには「空白の1日」とだけ書いてある。実は彼はマサイ・マラキャンプの最後の夜中から下腹が痛みだし、朝食はミルクコーンを匙1杯食べただけだった。しかも、標高1900mをナクル湖まで一日移動の日で相当時間がかかる上腹痛がひどくなったので、真ん中の2号車に救急要員の坂本隊員を張り付け車のシートにシュラフ・ザックを敷き、寝かせて行くことにした。「食あたりかも知れない……」と本人は言っていたが（しかし、多くの隊員は「水あたりだ!」と断言した）。

残念ながら他の隊員はパイイヤ、卵焼き、オレンジジュース、ソーセージ、コーンフレーク、コーヒーといういつものオイシイ食事をきちんと済ませた。

出発を30分遅らせて8時40分、マサイ・マラのキャンプサイトを出発した。

慣れっこにはなっているものの相変わらずの凄い道を走る。先頭車が途中で「はみ出し禁止」と「スピード違反」でパトカーに止められ、罰金600シリングというハプニング、おまけに、3号車の面々は車のショックアップスーパーの修理という経験をしながら半日かかって夕刻ナクル湖N.P.のゲートに着いた。遠くから湖を見たみんなから歓声が上がった「すっ……ごおーい……!」ピンクの絨毯、フラミンゴの大群が待っていた。

18時30分湖のほとりの林の中のキャンプサイトに着くと何とマサイ・マラのキャンプスタッフ6人がすでに到着していてすでにテントが張られていた。

平隊員は大事をとってテントの中で休むことにした。お陰で絵ハガキを何枚も書くことが出来たらしい。しかし、平隊員はこの一日間、ナクル湖を含め、可愛そうなことに何も見ていない。ノートの「翌日はまたサンプルへ移動の日で、これは1日がかりの長旅である。ナクル湖を横目にみながらここを後にすることとなった……」の文字はみんなの同情を誘う。

ナクル湖N.P.はナイロビの西方156km、グレート・リフト・バレーの一角に位置し標高1770m。熊本でいえば市房山（1772）の頂上にいるようなものである。この見どころは、なんといってもフラミンゴである。200万羽が集まるといわれ、他の水鳥も沢山見られる。ソーダ性の湖のみに棲息し、藻類や軟体動物、小さな甲殻類を食べ、その食べ物によってピンク色になるという。

ナクル湖で見られた鳥は、オオフラミンゴ、コフラミンゴ、モモイロペリカン、カワウ、コビトウ、カイツブリ、メダイチドリ、シロクロゲリ、イソシギ、セイタカシギ、コアオアシシギ、アフリカヘラサギ、クロツラヘラサギ、ズアオカモメ、ハジロクロハラアジサシ、クロハラアジサシ、クロトキ、サンショクウミワシ、ハゲコウ、コウノトリ、アフリカトキコウ、エジプトガン、ホロホロチョウ、など枚挙に暇がない。坂梨、長尾、高野、田畑隊員らは食い入るようにシャッターを押し続けた。松岡隊員はフラミンゴの羽を拾って満足していた。

ここでみんなが啞然とする出来事が起きた。

みんな岸辺でカメラやスコープ、双眼鏡を構えているのに、ナント、松浦隊員がGパンめくって裸足のまま水に浸かってプランクトンネットを引いていた。寄生虫がいて非常に危険なのでドライバーのジェイムスも「入らない方がよい」と言っただけではないか（以後、彼は帰国してまで発病しはしないかと悩むことになる）。

夕食後はその彼を着に、厚着してキャンプファイヤーを囲み、アフリカでの野外生活最後の夜を堪能した。と



ナクル湖でプランクトンネットをひいた最初の日本人？
前方はフラミンゴの大群

にかく寒かったしかし、ナクル温泉？に入った唯一の彼は半ズボン、ホッカイロの効果があったのか平隊員は元気になってきた。

8月7日(15日目)

全員6時起床。太陽が赤くとても美しい夜明けだった。テントの上の木にはバブーンやベルベットモンキーがときどきやってくる。朝食後、キャンプスタッフとの分かかれの挨拶を済ませ北へ向かった。本当に優しい人たちだった。

1時間ほど走った所で立派なコーヒー農園で車を止めた。赤い実と白い花が印象に残った。さらに、一時間ほど走るとトムソンフォールという標高2288m荷あるきれいな滝を見物した。緑豊かな一帯はここがアフリカとは疑いたくなるほどであった。さらにここからサンプルを目指した。

サンプル国立保護区(8/7~8)へ

ケニア北部は緑豊かな大穀倉地帯である。コーヒー園、紅茶畑も見事によく手入れされていた。しかし、サンプルは乾燥し、サファリカーの舞上げる土ほこりは真っ青なアフリカの空に20~30mまで上がって行く。

13時45分、サンプルN.P.のゲートに着いた。門に掲げてあるオリックスの頭骨が見事である。1mはある真っ直ぐな角が印象に残った。

ここで縞模様が細く、動けば目がまわりそうなグレイビーシマウマが見られた。「美しい……」。その他、アミメキリン、イボイノシシなどを観察しながら14時サンプル・ゲーム・ロッジに到着。疲れているので午後のサファリは中止し休憩を取った。久しぶりのロッジ生活である。各部屋でシャワーを浴び5日間の汚れを落とし、紳士と淑女に戻った。平隊員は回復したが今度は、坂梨隊員が吐いてしまった。(きっとマラリアの薬のせいだろう)

すると今度は田畑隊員がロッジの係員からなにか注意

を受けている。「洗濯ものは部屋に干すか、ランドリーに出せ」ということらしい。クリスマスでもあるまいに入り口に「クリスマスツリー」のように洗濯ものがぶら下がっているのはやはりひんしゅくをかう。

このロッジも設備がよかった。エウワン・ンジロ川のほとりにあり、川から上がって来るワニや、森からロッジの庭にやって来るレパード(ヒョウ)を見ることもできる。コーヒー・紅茶が自由に飲めるテラスがあり、その前の広場には、ワニ、オオトカゲの一種が見られる。広場のむこうにの茶色の水が流れる川ではワニが音をたてて川に飛び込むのが見られた。

夕食を取ろうとしているとき、騒動が持ち上がった。「ヒョウがヒョウ然」とあらわれた、食事を中断して人の波が庭に寄せていく、すると木に縛り付けた肉片にヒョウがぶら下がっているのではないかと、坂田隊員はカメラを持ってぎりぎりの所でかぶりついている。いや、カメラを構え、平川隊員は「高崎山の猿ではないはず、ヒョウはもっとこうきなもの……！」機嫌が悪かった。それもそうだが、ともあれゾウ、ライオン、クロサイ、チーターとともにアフリカでのビッグ5と呼ばれる動物で、「まだ見れなかった最後のヒョウを見れたのだから……ヒョウウウコトにしよう」とみんなに説得された。

このときまたハプニングが起きた。

「レパード(ヒョウ)が出たら知らせてくれ」と食事もとれずベットに寝ている同室の坂梨隊員から頼まれていた長尾隊員が、部屋に戻る途中ゾウに出くわした。

距離10m、通路の真ん中に立ちただかかって、バリバリ音をたててアカシアの葉を食べているのではないかと、迂回しようと芝生に入ると刺が刺さって歩けない。ライオンに勝るアフリカの王者の迫力を柵なしで見れる機会などと感慨にふける余裕などあるはずがない。「呆然」としてしていると騒ぎを聞きつけたロッジの係員が石を投げつけ追い払おうとした。すると大きな壁はゆっくりと動き、暗闇におおわれた川の中に消えて行った。……これも……アフリカなのだ。

ここサンプルN.P.は、万年雪をいただいたMt. KENYAの北方にあり、ナイロビから約300km離れている。面積は100km²と余り広くはないが、砂漠があったり、大きな川があったりするので、動物は種類・数ともに多い。植物はヤシ、赤い花の咲いた大木のアロエやサボテンが目につく。ゲートを入ると、いろんなものが姿を現した。

さて、ざっと見た生き物を夢中でしたためたメモからそのままあげよう……(多少のメモミスは許されよ)ラクダ、バブーン、グレイビーシマウマ、ジリス、ゾウ、インパラ、オオトカゲ、レパード、アミメキリン、

デイクデイク、ゲレヌク、サバンナモンキー、サンブールライオン、グラントガゼル、オリックス、アフリカジュズカケ、ヒメアマツバメ、オオハシガラス、キサイチョウ、フサホロホロチョウ、クロオウチュウ、クロコダイル、マミジロスズメハタオリ、ハゲノドシャコ、エボシクマタカ、アフリカトキコウ、ハイガシラショウビン、クロガシラジュウタンハタオリ、クリイロスズメ、ヤブモズ、ズグロオナガモズ、オオアカオナガゴシキドリ、バラフヤブモズ、キバシコサイチョウ、チュウヒワシ、ダルマワシ、ハイイロシロハラエボシドリ、ハゲワシ、アフリカジュズカケバト、キンムネオナガテリムク、ネズミドリ、セグロコサイチョウ、スズメハタオリドリ、ハイガシラスズメ、アフリカヒヨドリ、チャイロネズミドリ、ゴマフオナガゴシキドリ、コシジロウタオオタカ、ライラックニシブツポウソウ、ズグロアオサギ、サンシヨクウミワシ、オオハイタカ、ワライバト、タカグロトビ、モモジロクマタカ、アカハシウシツツキ、コシベニベリカン、ハゲコウ、アオサギ、アマツバメ、コウヨウチョウ、ツキノワテリムク、オウカンゲリ、スズメタカ、ダチョウ、タテフカナリヤ、オリブツグミ、タイヨウチョウ、エジプトハゲワシ、キクユメジロ、クイナ、マミジロツグミヒタキ、メジロアオヒタキ、ホオジロ、アフリカワシミミズク、イソシギ、オオカナリヤ、アカメジュズカケバト、メジロアオヒタキなど。

1mはあるまっすぐな角を持つオリックス、オスのオリックスがメスの後ろ足を自分の前足でチョンチョンと触る求愛行動、首の長いゲレヌクが後ろ足で立って木の葉を食べるしぐさ、1m近さで餌を食べてくれるジリスの可愛さ、悠然と居座っているワニやオオオカゲ、食堂のテーブルの上を飛び回るサバンナモンキー、10mの近くで恐怖を感じさせてくれたアフリカゾウ、堂々と車の前を歩いて行ったヒョウなどなど数々の場面が洪水のように我々に押し寄せた。



サンブールを去る途中、車のすぐそばで食事中的のダチョウに出会った。青い目のその美しさに心ひかれる

ケニア山国立公園（8/9～10）

南半球から北半球へやって来た。最初アフリカに降り立ったところがナイロビ（南緯1.2°）であるから、今まで回った所はみんな南半球である。「赤道は太平洋を船で行くときに通過するものである」という変な既成概念があり、赤道を陸上を歩いて渡るとは何かしらwakuwakuするものがあつた。

自分の足で確実にまたいで通つたのであるから、その感激はまたことさらであつた。

ケニア山の西麓にNanyukiという小さな町がある。ナクルからサンブールへ行く途中、ここを通るが、「赤道の町」として賑わつていた。

道路際に看板があつた。「EQUATOR」とあつて、その表裏が丁度南北に向いている。当然のことながら特産物の土産物売り場がある。外国人観光客が集まつていた。ここはケニア山への登山口でもある。11時07分赤道をまたいで記念撮影となつた。

ここで、面白い街頭芸人とまでは言えないけれども、「見せ物」を見ることが出来た。現地の若い男が何やらしきりに喋りながら、「赤道」の看板の下に座つたり、南へ走つて行つたり北へ行つたり、忙しそうに立ち回っている。しかし見ている人はあまりいなかった。「なんじゃ……？」

近付いてみると、こういうことである。その男は、水を入れたポットと、底に小さな穴を開けたボールを手にしている。「赤道」看板の下でポットからボールに水を入れ、水にマッチの軸のような小さな木片を何本か浮かせる。水が穴から流れ出る。別に何も起こらない。次は南の方へ20m走つて行く。同じ事を行う。今度はどうだろう。何と木片が回り始めたのではないか。渦が巻いたのである。次は北へ20m行つて同じ事を繰り返す。今度は逆回りに渦が巻く。

「なるほど、転向力の実験だ」「なかなか感心な男がいる」「なるほど……!」「すばらしい!」と隊員の感想は様々である。北田隊員は感動して連撮だつた。

しかし、何人かはうさんくさい疑り深い顔して「うん?…まてまて……よ!?!」、なんといつてもここは赤道上である。20m南へ行つたり北へ行つたりしたところで、それこそ「50歩100歩」にもならないではないか。それほど地球自転の影響が強いとでは考えられない。

そこで、平隊員の登場である。

「赤道から南か北へ20m離れた所の転向力の大きさをちょっと計算してみよう。 $F = 2mV\omega \sin\phi$ 計算し易いように、仮に木片の質量を1g、動く速さを1cm/sとすると、 $F = \omega \sin\phi$ となる。 $\omega = 0.0000726(Ra)$ $\phi = 0.7^\circ$ $\sin\phi = 0.0000031$ $F = 0.0000726 \times 0.0000031(erg)$



赤道をまたいで記念に1枚。右が北半球

$F = 2.25 \times 10^{-10}(\text{erg})$ となる。これは先ずゼロに等しいと考えて良からう」「これはおかしい。こんな狭い範囲で転向力が起きるはずがない」

「そうだ、そうだ、ソウダ、ぞうだ……」と一同納得。

そして、後で決定的なことに気付いたのであるが、南側が左回りで、北は右回りであった（南側は右回り、北側は左回りのはずである）。うさん臭いみんなの目付きは正解であった。ともあれこの着想と名演技(?)にチップを20シリングはらずで気持ちに感謝し目的地ケニア山国立公園へ向かった。

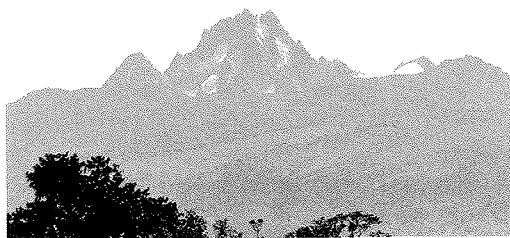
サンプルルから南へ下り、また赤道の町Nanyukiを通って南半球へ入り、標高2000m前後のケニア山西側山麓をぐるりと回って、ケニア山の南西側中腹のマウンテン・ロッジ（標高2195m）へ着いた。

ケニア山国立公園はケニアのほぼ中央にあり、標高5,199mのケニア山は赤道直下にありながら、万年雪を頂き氷河さえあるという。すそ野には広大な森林が発達しサバンナとは違った自然がある。ここのマウンテンロッジへの道路際ではまるで九州の山間部を走っているような錯覚に陥った。葉の形はやや異なるものの木や草の雰囲気がそっくりだった。まるで阿蘇である。阿蘇の黄色の盆花そっくりの花が両わきに咲く道 را 走り、標高2,195mのマウンテン・ロッジに到着した。

ここで2泊3日、これまでの疲れをいやすため別荘にきた気分である。屋上まで入れると何と4階建てにもなる木造建物である。

学校の運動場くらいの水溜まりにアフリカゾウ、アフリカスイギュウ、ウォーターバックなどが盛んに訪れ、サイクスモンキーは高崎山のニホンザルよりしくロッチの玄関先でマウンティング、グルーミングなどさまざまな行動を目の前で繰り広げてくれた。

あるとき、ベッドで昼寝の真っ最中足を踏まれる感覚に「だれだよ……」と目を開けた。なんとサイクスモンキーが微かに開いた窓の隙間から入ってきて鉛の袋を足元で開けているではないか。「ワッ！さるだ！……」そ



万年雪をまとうケニア山 (5,199m)

んな騒ぎもあった。ここのロッジからの朝夕のケニア山の眺めは素晴らしいものだった。ケニア山はケニアの最高峰で、火山である。やさしいキリマンジャロに比べて、この山は男性的で険しく、アフリカで一番堂々とした山と言われている。

このロッジの周辺は、ケニア山から流れ出る豊富な水のため、ジャングルの様相を呈している。従って車で乗り回すということが出来ないのです。ヒト様はロッジに閉じ込められたままで外には出れない。散歩くらい出来るようにしてあるけれども、通り道は両側とも頑丈な塀で囲っており、ある間隔で逃げ込み場所も作ってある。

ロッジの下の小さな湖を見ていると、その周辺にいろんな動物がやって来るのを見ることが出来る。高い木の上では特別保護指定されているキリマンジャロコロブスが、枝から梢へ跳び移って戯れている。

バッファロー、ゾウ、サイクスモンキー、キリマンジャロコロブス、ブッシュバック、クロサイ、マーシュマングース、デファッサウォーターバック、ジャイアントフォレストバック、エジプトガン、アカハシウシツツキ、ズグロアオサギ、クイナ、オリーブツグミ、マミジロツグミヒタキ、メジロアオヒタキ、ホオジロ、アフリカワシミミズク、イソシギ、アオサギ、アフリカクロクイナ、セグロフクレモズ、オウカンエボシ、オオカナリア、アカメジズカケバト、セグロヤブモズ、ムラサキオナガタイヨウチョウ、アフリカヒヨドリ、タイヨウチョウ、アカクロノスリ、ダブルカラーードサンバード、キマユカナリア、ネズミドリ、トビ、ミミグロハタオリ、タテフカナリア、ワシミミズク、サボテン、アロエ、ナス科の植物、ピンクの花の植物、アサガオの様な花の植物、葉の表裏に刺のある植物、花いかだのような黒い花の植物。

ナイロビ (8/11~12)

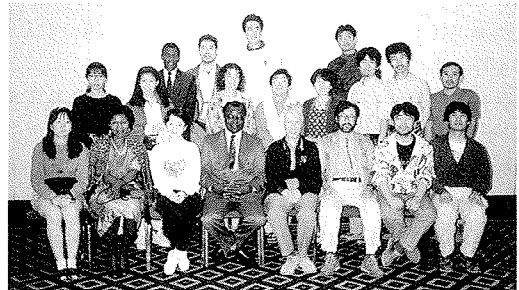
ケニア山国立公園で、この度予定された行程をすべて終え、ナイロビのアンバサダ・ホテルへ帰ってきた。久しぶりにゆっくり市内見物や、ショッピングが出来た。国立博物館、国立民族舞踊劇場、民族村、ヘビ公園、動物孤児院、カレン・ブリクセン(アイザック・デイネーセン)博物館など見たい所は沢山ある。それぞれ分かれて市内に散っていった。

しかし、藤吉、長野の両隊員は支払のための両替や、帰り仕度のローブなどの買い物のために何処にも行けず、銀行やスーパーの行列の中で貴重な時間を費やすという悲しい運命を経験した。

「珍しい食べ物はなんだ？」と聞かれたら、「インパラ、鰐、そして魚のナイルパーチ！」と答える。レストラン「SYOUGUNN(将軍)」での日本料理(刺身、

寿司、豚のしょうが焼き、麺定食、冷や奴、なす田楽、鱈の塩焼)は別として、焼肉専門「カーニバル」でのパーベキューは逸品であった。豚、インパラ、クロコダイル、チキン、牛、ラム、ワニなどの大きな肉の塊を長い槍に串差しにして、物凄く大きい炉でジュージュー焼いたものを、刀で切り落としながら一人ひとりに配って回る、という豪快な食べ方である。

8月11日の夜、ナイロビで小原教授と会い、教授のお取り計らいでニュースタンレーホテルで元環境観光大臣、現アフリカエレファント・インターナショナル会長オリンド博士の特別講義を受けられたのも嬉しかった。1989年に輸出禁止になった象牙の問題、20年前はアカシアの森だったアンボセリの乾燥化の原因(ゾウによる被害、塩害、マサイ族の放牧、サファリカーの使いすぎ)などを質問を交えて1時間聞くことができた。これもよく覚えている。



ナイロビのホテルでオリンド博士(中央)の特別講演の後小原秀雄教授を囲んで

8月13日 日本へ

いよいよ帰途につく。午前中にボンベイの空港に着いて6時間ほど時間を費やす。ここでまたバゲージを開けられて中身を出されたり、訳の分からないチップを要求されたり、トイレでチリ紙を押し売されたり。何人かの人にいろいろとトラブルがあったけれども、翌14日16時55分、全員無事に熊本空港に着くことが出来た。

あとがき

「報告」をまとめるに当たり、平隊員、藤吉隊員両氏の多大なご協力をいただいた。平隊員の原稿はアフリカ大陸の成立過程、地質にも記述が及ぶものであったが、枚数の関係で割愛しなければならなかったことは残念であった。藤吉隊員の「森のたより」に掲載された体験記は、彼が主宰する「矢部郷自然観察会」の子供たちに楽しく分かりやすく語りかけるようなもので、未来を担う子供たちに夢を与えるもので素晴らしいものであった。自分だけのものにせずできるだけ多くの人に自然の大切

さ、素晴らしさを語りかけることは熊本野生動物研究会の基本的な目的を具体化しているものだけでなく、現代社会で重要な意味を持つ。

「自然認識、自然に対する感性を育てるには小学生の頃がいちばんよい」と言っていたものを実際に実行した彼の実行力は、素晴らしいものである。

「アフリカ」と言えば、ジャングル、猛獣、さそり、人食い人種、そしてマラリア、黄熱病などを連想し、どちらかといえば暗いイメージの方が強い。これは、私たちの年代が、ターザン映画を見、ジャングルの先住民が白人を捕らえて、その周りで踊ったり騒いだりする場面を、映画や本で見て育ったせいかも知れない。しかしそれも元をただせば、19世紀の末、アフリカ大陸の西海岸から赤道に沿って熱帯降雨林の真ん中を、5カ月間もかかってアルバート湖まで踏破した、イギリスの探検家H.スタンリー（1841～1904）が「In Darkest Africa（暗黒アフリカ）」として初めてアフリカを世に紹介し、また西海岸に上陸したヨーロッパ人達が、暗黒大陸のイメージを作り上げたからであろう。

ケニアに着いたら、ホテルでもロッジでも先ず「ジャンボウ！」で始まる。朝から晩まで「ジャンボ」で始まり「ジャンボ」で終わる。顔見知りも知らない者も、「ジャンボウ」と言えばお互いすぐ打ち解けて来るので、不思議なものである。人も環境も大変清潔で爽やかである。彼らの「目」のすがすがしさは一生脳裏から消えることはない。

ナイロビはきれいなビルの立ち並ぶ、近代的な大都市だった。ナイロビから一歩離れると、まだ全く汚されていない大自然が広がっている。これは国の政策として自然保護に力を入れ、国の財産として守ってきたからにはほかならない。お陰で私達は短期間のうちに、自然のままの、さまざまな地形や動植物の営みを観察し、そして素朴な人間の姿に接することが出来た。

しかし、ちょっと考えてみよう。ある地域におし込められた動物を見るために、ゲートをくぐり、お金を払い、厳しいチェックを受けなければならない。そうすれば間違いなく、ゾウやシマウマ、ライオン、キリンが目の前に現れる。

以前、ある評論家の一文に次のような意味の事を書いてあるのを読んだ事がある。動物保護区の動物は、初めは自動車を怖がるので、あまり近づくことはできない。ライオンが餌を得るために狩りをしようと、例えばインバラの群れを狙って気づかれないように獲物に近づいているとする。それに気づいた人間が、ライオンの狩りの様子を見ようと車を近づける。インバラは車に驚いて逃げてしまう。ライオンはせっかくの狩りを邪魔されて、

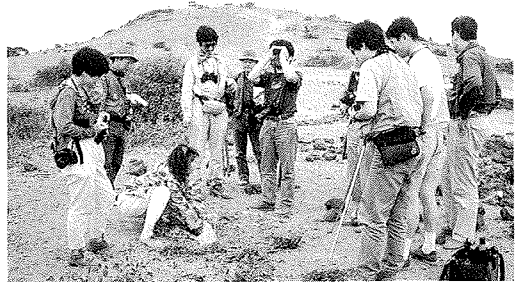
車を嫌い、車に近寄らなくなる。ところがだんだん馴れてくると、インバラは、これでは自動車の近くの方がかえって安全だと思って、車の近くまで来るようになる。すると今度はライオンが車の陰に隠れてついて来るようになる。

本当の自然とは一体何なのか難しい問題である。槍を持った青年達が、三々五々狩りに行く姿を見ると、動物の姿はあまり見かけなくとも、あゝこれが本当の自然の姿かなと、ホッと胸をなで下ろしたくなる気持ちも禁じ得ないのである。

アフリカ大陸は広い。赤道を挟んで南北8000kmに渡って横たわる。日本の80倍というこの地塊には、多種多様な自然と文化を育んで来たはずである。アフリカの一端をちょっとばかり回ってきて、アフリカを語るなんて大げさなことを考えたつもりではないが、ともかく百聞は一見にしかず、話の種は尽きないという程感動し、発見し、驚いた事が多かったのだから、だらだらととりとめもなく書いてしまった。象の体を撫で、壁のようだといい、柱のようだというたぐいにもならないかも知れないが、少しでも彼の地の紹介になれば幸いである。

しかし、記憶とは、悲しいことに「日々薄れていくもの」である。

活字、文章にして残すことで、「この素晴らしい貴重な体験」は記憶はいつそう鮮明なものとなってその都度蘇るであろう。それは、多感な少年時代の思い出の感触に似ている。



童心に帰ってフンコロガシの幼虫さがしに熱中

また、このまとめは、記憶を活字にすることで参加者の記憶を呼び起こすスイッチとなるであろうし、記憶を手繰る糸にもなる。そして、これからアフリカに出かけようとする人たちの参考になれば幸いである。

この「報告」（アフリカ体験記）はこうした意図からも編集されたものであり、みなさんが、これをお読みいただき「活用」の一助となれば幸いである。

最初に訪れた東ツァボ国立公園のボー・サファリロッジの眼下に見た広大なサバンナから受けた感動は終生忘

れ得ぬものになった。点々と、そして延々と続くテーブルアカシアの木と草原、煉瓦色の土と真っ青の空を写した水溜まり、そこにやってくる子連れのゾウの群れや、シマウマ行動……。草むらで遊んでいたライオンの子供たち、……。足元まで平気でやってくるロックハイラクスに動物たちとの接触の仕方を見だし、オリックスの求愛行動、ウォーターバックの順位争い、アフリカスイギュウトサギの共生関係などサファリカーの前で繰り広げられた、TVの「野生の王国」さながらの動物たちの様々なドラマは、私たちの感性のアンテナに洪水のように繰り返し押し寄せ、脳に記録する針は数え切れぬほど振り切れた。その残像の中に、今でも、誰かが叫んだ「This is AFRICA!」が鮮明に耳に響いてくる。

人類発祥の地アフリカ!

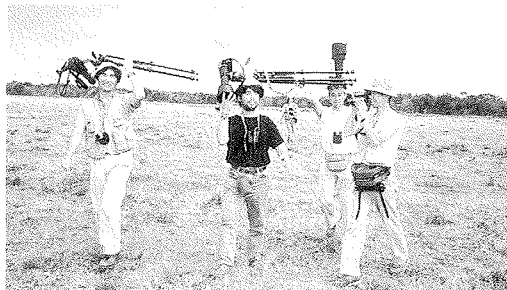
その大地溝帯の中の広大なサバンナの生態系は筆舌に尽くし難く、本物の野生動物たちの生き方からは学ぶものが多かった。それらはビデオ教材2本、スライド教材4本にまとめられ、教材として希望する学校に配布されている。総費用は全体で軽く1000万円を越えた。しかし、最高の収穫があったと思う。一方で、まとめはどうするか……。これは頭の痛いことでもあった。

参加者、つまり隊員の多くが各学校で担任、生徒会担当、コンピューター担当などと帰国後の多忙さは目に見えていたので、研修報告書にもなる「まとめ」を必ず行うために、県教育委員会の募集した「平成3年度熊本県公立学校及び幼稚園教育研究補助」の決定を受け、期限を設けてきちんとした報告ができるよう枠をはめた。



熊本動植物園での写真展

さらに、この研修を自分たちだけのものにしないうちに熊本動植物園で100枚程度のパネル展示を約2カ月間行った。子供たちにもアフリカの動物たちの生活ぶり、そこに住む人たち（マサイ族）、そして何よりも自然の素晴らしさを知ってもらおうという試みであった。6000枚にも及ぶ写真の中からの選別、説明文の作成、写真の配置、会場のレイアウト、マサイの槍、太鼓、面、など準備の苦勞も今は懐かしいものになった。



この苦勞なしに成果はありません。マサイマラのウォーキング・サファリで

カラーフィルムを数十本提供していただいた熊本日日新聞社にも、隊の顛末は「高校教師が見たケニアの自然」（11回シリーズ）として平成3年10月下旬より週一回（金曜日）紙面を飾った。

生物部会や地学部会での報告と発表、動植物園での写真展、県教委への報告、熊本日日新聞社への原稿提出、教材の制作とほぼ完璧なまでの事後処理を終えた。

しかし、何よりも多くの参加者が、生き生きとした体験で「動物の生態とその行動」の授業が行えたことが最大の成果である。

常日頃、デスクワークが多くなりがちで、「フィールド」に出て自然の息吹をいつも忘れないようにと思っていた多くの参加者の何よりの糧になったと思う。

熊本日日新聞の記事はそれをうまく捉えていた。

やはり自然は素晴らしいものであった。動物たちの様々な行動から、人間とも言う「ヒト」だけが何かしら特別な生き物ではなく自然の中の一員にしか過ぎないのだと改めて考えさせられたし、ノーベル賞を受賞したコンラート・ローレンツ博士の言ったとおり「自然の素晴らしさに触れた者は、その気持ちを持ち続ける限り、芸術家になるか科学者になるほかはない」というそのものであった。

最後に、今回の企画に対して御支援いただいたRKK熊本放送文化振興財団、共同通信社、熊本日日新聞社、熊本動植物園をはじめ多くの方々から厚く御礼申し上げる。そして、何よりもかかるとわがままを聞き入れてくれた家族に感謝している。これは参加者全員の偽らざるものである。

さて、みなさん次はどこに行きましょうか!?

引用文献

- 植村 武, 水谷 伸治郎編, 岩波講座 地球科学9
都城 秋穂編, 岩波講座 地球科学16
野沢 敬編, 朝日新聞社発行 週間朝日百科 世界の地理
渡辺 宏著, ダイヤモンド社発行 地球の歩き方 東
アフリカ 米山 俊直著 NHK市民大学 新・アフリ
カ学
日本地学教育学会, 地学教育 第34巻第2号, 第35巻第
2号
講談社出版研究所編, 世界の国 アフリカ
KYOIKUSYA Newton No. 0
J. G. Williams N. Arlott
A Field Guide to the BIRDS of East Africa
T. Haltenorth H. Diller
A Field Guide to the MAMMALS of Africa
J. G. Williams
A Field Guide to the NATIONAL PARKS of
East Africa
Teresa Sapiha
Wayside Flowers of Kenya
熊本県高等学校地学教育研究会 会誌(1991年度)別刷
熊本県立菊池農業高校 研究紀要(第12号 1993年)
矢部郷自然観察会 森のたより